

舞水先生隨筆卷之十七



○消遣隨筆

公事と職業とつまう戸心もののか私室とあれば
衣食とあく書局に仕事もあり少しばかり走り回り一モ
乃所でしも公ともなくよハあれと又折々と唐大
和の書を讀するよりありは多數のウヤの本
いぢらせると久しく疑に積るゝ事かと經年後
所へゐる所とあし又が入る化り人ふゝ尉してく
あくの談話をするあまの私室と煙草のうす
きとあると所がううにあり色鉛筆のうすのあ
う一序の老の身のうれい時と歌をく自ら思

大觀文庫

ひかへ、感奮せる。下りも多う。」る中より
世了書浦セラ。左序の如くの如き善行等を
タゞ。徽廟の聲常ある。もううの事なんと
あり。それウハ。此のうちれと拂し御と往ひ又
それよりハ己の恭敬の説起ゆ。とも事
仕也。書立も。とめ年久。うり。但是
仲季よりあらず。のをか意はむろく。他よ而す
へキ。よとは覺へ。左。筆。す。公私事。繁。
ばら事を見。ト。今。近。て。前。は。校讎。モ。ト
ヒジ。昨。ア。而。し。見。ナ。キ。ル。筆。セ。ル。五。よ。古
事。見。ア。リ。ア。言。モ。ス。ち。カ。ト。思。い
並。す。モ。タ。ア。リ。ア。有。し。法。わ。く。ヌ。聲。を。キ。ム

タ。信。い。ハ。彼。四十九。年。の。那。と。初。始。ヒ。バ。ク。
と。く。昨。夕。是。有。ト。知。リ。ト。午。日。非。卯。リ。ト。思。ふ。
す。ヒ。五十。ナ。レ。知。始。の。ミ。ス。ア。リ。ヒ。事。ノ。身。ス
覺。ヒ。知。レ。微。モ。ト。シ。タ。モ。一。され。ヒ。の。數。年。乃。高。
セ。カ。レ。ヒ。レ。と。五。あ。う。金。取。金。出。入。を。か。一。時。
後。ム。シ。一。孫。ア。ウ。ス。信。ヘ。ん。モ。ア。ヒ。ぬ。シ。シ。ル
ヒ。別。ス。本。織。ク。チ。ふ。モ。所。モ。此。ア。レ。ス。班。セ。費。
す。月。日。ア。レ。シ。片。積。ク。チ。ね。書。篋。内。を。搜。し
見。モ。ハ。師。の。房。ア。レ。シ。うち。留。藝。雜。記。が。ふ。
漫。錄。又。ハ。繪。或。漫。事。カ。ヒ。殿。セ。モ。教。冊。又。懷
中。の。掌。記。劄。記。の。教。冊。又。ハ。屋。宅。の。被。キ。ト。度。キ。ス。

稿一冊の屬の四録かの左ノアリといふと
ちかく佐而を替へたルハ内地在ふゞく晚漫
録洞巣漫録欄痕漫録かと顯るに散巻アリ又一
編の弟とも聞せるより「慎初録養才活法病氣三不
活醒世諦云心忘醫活外科錢菟伎能辰枝の前は
二冊東輿地名考解舊餘材微草錄活日贊言解病雜
志蘭瘦遺集開具劄記震雷餘考字帝の記事多
篇附事あらうすの記の軒此爲紀りテ諸編漂流人
字書序が著者庵あり「権あは漫録料にて少編め
形みどりめられぬ及さる」の「袋よ無づめくいくつ
あるかくあ」ぬ十但有よりへととくいひ立れ
數十卷より著書のとく坐せれと伝をつむぐ

よく擇えだけか取々無くりあうぬまう声うす
さきどあうよくうされハシハ老鍊の高じかさ
ム一めあうすのへタれはエリ「校西增減をもか
かは後といひ侍が魚タニモアリ「キソマヤヤレ」と
老々身の氣力、玉しくて「おれはたゞ」筋筋で
チ思ひのをかく元カーテ後のか身うけ難稿とい
もみうりよ人よ而すとあられ秋ハニルと記して
貞時くの備忘とかセーダムカク「細きれはナーミ
くゆきみ別よキ一帖を作、くシテナラの傳く布
ある銀」見キトよ独れり「余よ思ひが既る
よもと原ス既ヒトナダツ、書をめんとおる却
あれも亦覆營の易むし附「文化丁丑本卦の

一ノヒレカ歳のもう秋消夏の事すきみる茶
軒をもはちりと消盡隨筆と題せるハあがめ
丙未大炎役設けし書局の名を消盡稿倉と通
セシムリノ候。よろけるか。

○ 桂夕茶つゝ子セツ。あまる人の事。ハア酒
ぬまゆる事。あらう。あらう。彦つきく。もる人。
タクミ多知いをうりし多思ひつきる事。
済くより必ず考へ思ふ。もとむかあれ。而う事
の院あざとセハ。あキ人。多時。假。社。公
をもとまわる。

○ 火薙の時煙。まのれ氣絶する。ゆづ。生蘿蔔汁と
ゆづを。げ。作。ち。と。敏。生。す。れ。火。の。中。ば。毒。す。ける

時此汁を口に含めは息されず。とある
○ 何より先は得度。事不可再做。便宜之道。不可再行。と
ある。人。今日のう。まい。く。う。も。主。の。す。う。と。か。人
さ。ゆ。か。う。

○ 酒逢知己千鍾少詰不投機半句羨かれり。希。ある
ト。か。う。

○ 孔子曰春居葛室夏居密陽秋不風冬不煬飲食不饋飲
食不勤醫日是良藥也

○ 原和賢
春秋孔子養生清見公孫尼子文化十四年正月錄出
林以勸同好

○ 佛經。如是參聞の語。上方初の中何。といふ。といふ
コノヤウニイフテシヤハイナ。コンナイニイフテ、コザリ
ベニタハハイナ

之ノカアノヨリ仰通ひテヨリカアル說ニ迦是秋原
の見

林信駕春常先生事と仰敬せる一諸侯ある。元鎌古
徳の所あり。ある日先生が坐す。款待する先生
歳老も壯健なり。筋敵れよ。左背を拊して曰。膚理
潤澤豐饒。右背が老翁や。第一。一言の守る爲めに。何
讀みと。昂先生彦。唯比丘。何第。あひよ。され
り。と。仰。あハせ。以。名。ア。比丘尼。ナリ。て。萬物賣。タヒ
カ。南。カ。セ。ア。シ。ル。時。ア。多。シ。物。ア。物。色。ア。比。江
物。ア。ソ。ヒ。ア。レ。モ。ア。シ。ル。ア。教。ア。ね。ア。有。ア。ヨ。ミ。奥。江。民
間。ア。毛。門。ア。ひ。く。ア。ソ。ス。何。ア。謂。ア。ソ。ア。知
り。ア。その。ア。多。年。ア。稱。ア。相。ア。少。年。

カナハ相あつて右の訖エドニナレハ比丘ハサムに指シテ
カナナラニテ子猪モト元都下考時の御多々因リシテカ
守やり向く翁都下ノヘアリサウリ以ヒトハ比丘尼ナ
賣サ新方様の向又御身多能寺前モロコシの有リあり
ヨ等も考時アラシモアリヨシニシテ疑ひ解する
タニシニルハヨリカキヨリカキニ世の爲メ代
正義ナリと思ひし甲多の解

肥後の秋山山人書
兒孫は皆この書を古に傳
續として考へる眼到口到心到す
星月三刻と仰せられ又手到と仰げば口到と仰せ
三ツの事ハ皆此の屬す手写抄多々矣あり

ルの修身忘まるは矣。手書き功業。孫々とあり。と
すこの在る。友人讀書不加写ち。鶴林玉蘿。凡へ
ともいへり。ゆりどらく。あれを記し。亦秋の見事
も。先魚。とも後算。初かづし。附清居先生市
主。一。油多阿善。也。粗善。も。附。好す。連筆
あれ。うし。あれ。そひく。年号。独歸。也。書。と。事。まめ
よ。せよ。私。若。うり。時。年。鈍。く。秀。達。く。て。写。と。め
書。と。め。た。ま。と。男。い。一。物。を。物。書。と。い。まく。し。と。前
序。せ。す。私。薄。の。文。例。と。趣。セ。ル。跋。漫。柳。の。所。の。者。後
○ 仙臺。も。少。び。と。仰。い。ア。リ。と。クジヤウ。ば。從。る。とい。

○ 仰。仰。み。の。ソ。れ。を。効。ら。テ。リ。カ。並。ほ。古。跡。人。ト。ト
文。通。ウ。セ。ー。は。幕。波。光。と。苦。狀。を。ヤ。セ。し。テ。シ。ト。シ。ヒ
ヤ。セ。ー。初。」初。」初。」の。文。寫。を。讀。、あ。の。ヒ。シ。意。義。あ
タ。」モ。崎。祖。ウ。ヤ。仙。臺。が。肉。も。シ。カ。ト。ナ。初。及
ナ。ガ。レ。を。石。高。ト。ヘ。ト。モ。子。氣。と。ソ。ア。マ。高。高。
高。西。隔。絕。の。地。ケ。ル。と。モ。古。タ。ウ。キ。モ。有。ト。多。モ。サ。レ。ハ
カツ。ハ。命。限。今。リ。也。モ。兩。衣。を。ソ。シ。カ。ト。カツ。ハ。」南
夢。悟。上。衣。の。岩。カ。」南。夢。と。は。波。忍。杜。庵。見。伊斯。把。泥
セ。ー。」其。國。乃。諸。多。中。邦。メ。」キ。モ。夢。リ。ノ。夢。強
ウ。と。く。而。宣。だ。リ。モ。多。リ。ビ。イ。ト。ロ。ヒ。リ。ウ。ス。アル。ヘ。イ。
ホ。ク。ン。の。教。習。る。ヨ。ヒ。タ。ム。ア。リ。ハ。カツ。ハ。モ。チ。ツ。

トモ彼諸國ヲモ礼服ニ用る表衣^{アラヤ}白石^{ホクシ}紀宇^{ヨリ}ノル
ノルテニアツクモカセバ毛紙又織物等^{モノ}モ作室^{ナニマ}ト修^ス
ツバウスカツハウトギシメトキトア蘭陀^{ランダ}モニント
ルとも上^{アベ}省^シ礼服^{アラヤ}トカケルモ^ト身^フれ^ム加
以丹青^{タトシ}入^ル時用^カ多く^ハ黒^{マツ}織^{アラヤ}モ^ト又^{アリ}南^ミ畫人^{ミツ}省
用^カ見^ム昔^{アラヤ}レ^ル勿^ク定^ス定^スレ^ルヒ^ト似^ムト^ナタ^タ
タ^タ片方^{アラヤ}モ^ト時^{アラヤ}多^シ御^スト^レ候^スト^レ身^フ省^シ服^{アラヤ}
古^{アラヤ}ト^レア^リト^レ日^{アラヤ}製^スト^レ舊^{アラヤ}と^レ覆^スト^レの^ト
左^{アラヤ}省^シト^レ雨衣^{アラヤ}を^レ而^シし^ム縫^スト^レ雨衣^{アラヤ}を^レカツハ^トソ^リ
夕^{アラヤ}ト^レ夕^{アラヤ}レ^ルト^レ知^ル但^{アラヤ}此^{アラヤ}ハ^ト禮服^{アラヤ}ト^レト^レソ^リ
用^カリ^ト絹帛^{アラヤ}の敷^スト^レ製^スト^レ床^{アラヤ}綿^{アラヤ}ト^レ作^スト^レ
而^シ省^シ用^カリ^ト故^{アラヤ}之^{アラヤ}往^スト^レ金^{アラヤ}門^{アラヤ}と^レ雨衣^{アラヤ}

胸^{アラヤ}と^レ名^シ稱^スト^レク^ト思^スト^レ貞^{アラヤ}山^{アラヤ}衣^{アラヤ}の序^{アラヤ}遺^ス物^{アラヤ}
安^ス置^ス金^{アラヤ}右^{アラヤ}門^{アラヤ}彌^スト^レ紡^スト^レ吉^{アラヤ}子^{アラヤ}肉^{アラヤ}
中^{アラヤ}度^ス貞^{アラヤ}山^{アラヤ}孫^{アラヤ}所^{アラヤ}物^{アラヤ}諸^スる家^{アラヤ}中^{アラヤ}族^{アラヤ}ト^レ骨^{アラヤ}
ト^レ骨^{アラヤ}右^{アラヤ}孫^{アラヤ}中^{アラヤ}内^{アラヤ}鷦^{アラヤ}卵^{アラヤ}即^ス袖^{アラヤ}至^ス二^{アラヤ}人^{アラヤ}の^ト而^シう^ス
多^シノ^ト黄^{アラヤ}絹^{アラヤ}は^ト下^{アラヤ}而^シト^レ具^スト^レ且^スト^レ省^シト^レつ^スひ^スト^レ之^{アラヤ}
高^{アラヤ}別^スト^レ今^{アラヤ}の^トサ^カか^スは^ト内^{アラヤ}ウ^スモ^トト^レあ^リう^スモ^トト^レる^ス
半^{アラヤ}以^スト^レア^リ私^{アラヤ}く^ト名^シ呼^スト^レレ^ルト^レ思^スト^レ小^{アラヤ}袖^{アラヤ}具^ス
袖^{アラヤ}下^{アラヤ}者^{アラヤ}川^{アラヤ}つ^スも^ト下^{アラヤ}ろ^ヒし^ス上^{アラヤ}の^ト薄^{アラヤ}被^スト^レ用^カヒ^スト^レと^レの^ト
ト^レ効^スト^レり^スる^スキ^{アラヤ}あ^リ人^{アラヤ}金^{アラヤ}眼^{アラヤ}とい^フツ^スこん^スな^ス体^{アラヤ}色^{アラヤ}の^トア^リ
所^{アラヤ}中^{アラヤ}舟^{アラヤ}考^ス尔^{アラヤ}步^ス不^ス幸^{アラヤ}の^ト内^{アラヤ}鉢^{アラヤ}底^スし^ス外^{アラヤ}簾^{アラヤ}而^シ在^ス幕^{アラヤ}
チ^{アラヤ}一^{アラヤ}ツ^スの^ト徑^{アラヤ}慶^ス長^{アラヤ}十八^{アラヤ}年^{アラヤ}癸^{アラヤ}未^{アラヤ}の^ト所^{アラヤ}宿^ス記^ス錄^ス南^ミ畫^ス
人^{アラヤ}阿^{アラヤ}年^{アラヤ}自^ス年^{アラヤ}提^ス提^ス緋^{アラヤ}金^{アラヤ}服^{アラヤ}多^シ御^ス取^ス上^{アラヤ}と^レ云^ス所^{アラヤ}

人者用セし人セもあリし奉セめ進物セりタマき欲セれタマ上セの舍
ありセれ服セのカツパかリとシルセトシ内セ朋セ底セ猩セ排
の舍用セをシ先セよシ用セセリ却セ。所セ多セモシありハリも
キシれラウ名セトシよシあリれハ舍用セトシ兩セ舍用セ
モシレカきシよシリシきシアリ。而セ舍用セトシ兩セ舍用セ
レカちシ稱セトシカツパ。而セ服セのよシ用セい而セ舍用セトシ別
よシ製セし而セ天セ時セ之シ用セ一シ用セリクとも思セリ。細仙客
の諸セちのゆセ落セけシの床セ地セ在セ候セ。ウチ
人セ取セ士セうシ居セる。蓋セ常セの庇セ候セ。而セんと稱セセリやシ。而セ小
ハ雨セ落セ。而セ時セも少シかシも。ときシハ少シ。而セ御セ舍用セ
とシ者用セし。他セ人セの事セへリくシ。既セもすシ。而セ御セ舍
すシ多く多シれ。而セ思セワシ翁セ幼セ弱セ。而セ時セ少シ。而セ御セ舍
みシ不セ涉服セ。而セ少シ。思セひ。而セ少シ。而セ御セ舍
けシ直セ。彼セ是シを以シ。猶セ考セれ。背セ時セカツパ

といふよりを礼服の根柢と用ひ、年々とぞ名號にて
之を用ゐるやと思つる。國の従事も農工等の病入堅
く此れを禁制する所である。而
其者ハ蓑布とすとさうして油紙とて作るこ
とあり。これと相浦とツヒ兩庄門^{通称}セドといふが此
而善等あつてある。士人^の雨衣の錦^の紬^の毛織^の
金^の名^のを用ひ、半長夏^の也。左胸^をうちすりつむかひ
多^く呼ふ。右^はかれとてぬ着^の左胸^の鷺^の名^の通称
者有^る。礼服^はあれ、絹衣^をすあれ、被^た、而^は物^か

西德年同自石先生羅瑪人。甚清在の名を聞ゆル
リテヲレ善也

其汚衣。ホルトカルの汚はカツハ。ソノ若秋佐
其御着ノ。傍り兩衣を作竹。今更製を珍り。ムシ体
ヨニルカツハ。といふ物。トトカレ。シテ。クビカミ。アリ。而
ヤレ。く異也。これを身ヌ。彼キモ。前襟。アリ。ボタヒ
ヒソマ物。と。メシ。左右。と鎖す。質拂。ヌ。ボタヒ。ルトカル。の。汚。アリ。
ヘ。其。シケ。長く。一。地。を。曳く。も。三四尺。ム。至。本
師。以下。其。掌。筋。の。毛。下。ア。リ。ヘ。其。シケ。の。長。短
あり。本師。の。着。白。而。少。特。ヌ。長。く。一。地。を。曳。く。す
教。尺。侍。者。一。て。これ。と。ナ。ウ。一。め。ヌ。ゆ。く。也。ソ。シ。ぬ
質。拂。ヌ。支。高。シ。お。内。ク。彼。地。ヌ。ね。ク。帰。ル。リ。チ。コ
ヒ。モ。リ。シ。ク。高。シ。シ。リ。ハ。被。多。形。絵。シ。ク。被。地。
所謂。カツハ。ア。ウ。タ。ス。ス。拂。ヌ。今。ハ。汚。衣。の。ミ。カ。レ。シ。被。地
方。の。れ。股。と。ア。リ。シ。ク。ヒ。思。リ。。移。それ。と。ハ。カ。レ。ル。レ。ト。シ
眼。宿。衣。の。髪。服。多。綴。ア。リ。ト。ア。ク。ヌ。序。時。ハ。髪。眼。宿。衣。高
眼。わ。の。札。服。ヒ。カ。レ。ル。も。以。シ。る。所。あ。ク。

ケレトニ席屋といひります。寛文のひに繪は見の寛永
の日(1654)晦日ノ夕や途中も飲食調(カ)所か
叶支家現頃のト。頃ハ増額竈食所也。又野也
陪書煥帝(タマニ)毎之一所輒教道置頓史記王翦傳三日三
夜不頓舍云々食事調ル所ナリ。ケレトニ飲食の事
を考す。現の亭(ヤシ)在カ有(アリ)。用モ一て持カ
ク。色(カラ)ム。現在する所(ヤマ)ケレトニ席やヒ
シヒリヒ思(スル)ム。ナリ。の席屋といひ。是キ賣(アリ)
モノナリ。水(ミズ)兼(アリ)。の事(モノ)ナリ。ナリ。ト思(スル)
カ。一傳(ツイ)禪院(ジンイエン)の門上(アゲル)。席(シテ)カナリ。ナリ。賣(アリ)
茶(チャ)を切(カス)ル。下(アシ)と石代(シタ代)。神(シメ)。ウドソバア。ナリ。ナリ。ナリ。

かう事ゆる

○ 宗啓期う三舉ハ第一ハ人と生れゆる第二ハ男とお
おゆる第三ハ九十餘り事と保ちゆる貧ハ士の
常うと夫みよ多へたうへいと年ゆくたる
年かうされば後キリ世と仰ぐくハ舉ゆるより
あるを其第一と太平ニ生れ士若みの間ゆ位し
都唐ニ住居しあるハ久く貧ゆりもかよりへ轍
轍ミカモトあれヒリ立し人トある
ヒトウのホーナを拂せんと秋忙めり而み
ハ賢ト一拂カリシカシ愚カリドナタナシ
ナシするハカツルテナ賢愚利鈍ある者人り
をナアリシ成れるよとはあり乍ら皆老夫の

乙ヌ布拂リカレヒラヨ惣ルヒセんアカシ賢
キタリハ見有ハけはつあ、華般の身、身ニ
體し御ハ詰め秋吉とカルハ日(月)ニ智ムレ
タニハアメマキロカクアレ善調子けハ後アヒ
西ニ妙タヒ遠く(シ)と自ウツ教新アツミモ
向くヌ事は湯ルハ苦樂ヒカヨ常ニ古ヘ未モ
愚ニ生ハ需ムタリハ樂トキアリモ空金キタ
リテシカクも樂トキアリモハ教一人
のミアリヒテカヨ覺(トキ)至^音サ満^音ニ仰
ムハ不精不和良カニ嘗不正徳^音都唐^音のたくひ
皆愚^音アリモカク賢^音トキ人の丘^音アレ

と見れり不復とゆひと聞しよりいかゞぬか」左の
聖賢といひにれしもとすの天能、帝に加ふりあり
以可仰より黑白と菽麦と爲每へ御すアの天
性を歎し人よもあれよりあそ世よ主うき事の
第一とすにこゆと每へぬ愚人、畜賊よまき患
難よまれ若弟々絶る召かず詔よ見ゆり切、愚
クの性を歎する者、賢者の金石にせして知り者の
諸事に交りて我愚情かうす、多分の應する事の
有ルルハ勿タ悲哉、と以カ重し才もたりむ金
石には智も深く實も所々あうに才智もよ誠
に心ありテ已く居ヤ世ノ益よもたゞる
而ナ左、歎タヌムうけ右御の心ハ后れする事あ
慶ム加ル

○
タトモルヲヘ馬々生れはる人、地のよーあーが
見守一七ぢ丈々知つうすし一生が終り切何
よおル也乃ある、(が)、筋落をも外へる程
生れはた。あも古ルヌ主じゆる事、なうす
寛永ニ年ウヒウヒよ海傍ウ徳峯老人と云は(し
人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)
李夫人(人)、(人)、(人)、樊噲、張良の如けき無(う)セ(た)て
名(名)、(名)、(名)、(名)、(名)、(名)、(名)、(名)
織田信長、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)
の參と五天子を蒙す(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)
き(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)、(人)
慶ム加ル

野見れもむう一の人に誰からへ持の名
をあらぬあけの下つか

豈ふのる異國へ賈多り秋船の夢乃帝の船を
すゝめりたるしかし畜主下と保ち立て帝がも
原経の時といへりして身は往來す冥とてしむ
すう引従き是那をアブウハんあらやむ財金
ソトはりか化のへえをアラシイク詮財金とく
リへおきてり身はカウてばモ絲眷属争ひつ
うを以りて世よ笑種のあはをまに至君臣父子
夫婦正友朋友のあゝ一きゆ中も歟はあらしう
エトアリ身をや多宝物を持ンカタモルカニキ
ハユウ御ヌアキムカツツコロヒトモ明く鉢詮

夏もあづき火とおもれは主あるじは名のまをきみ
シソと川も在利あぬシテア生死ともおもれも欲
みぬゆきつゝ移らし宿あるよりむきゆき火急駕
降の塙わカク所もつゝ終ふ接きすありれ手を
かくい車、あどひ材劔をみちくておとめ
ぬの色かくい加茅ノエサテ、あき、れかき、
め玉ヌバあらにまうときか、年少の秋糸、あうぬ
おもく人、まつてくとも、あらかじめ、
たくちる財、多めあ久し、劣をて、却き、
あつめくる人の幼、久からほしてわくと見ゆき
大弓のくめよ草木の色、中暗袖、きおさむさむき、
さく、あづけしをとむらむ花入、一枚二点

うれしさももめやもかゝへ花咲花のと前段の
株木の日かれする多盤木ともナクれこうなく遙つ
ういと見せらどめて見かれぬうつし極くる。始
めつうし此を及見すめゆるふりおほし事の
事。めつうし多きうちあらんとあく名づけられ
人の心のおまえにまじうぼうかも重み絶めく人々
をける事さへ人となふまれとめ附のうだを主な
て後ついゆほん人へかし五舟よ

ナレくともよ一聲はいとうといひをそんお引

クも轟人のあら傳を

ちふ免す愚痴のまゝの心つもからりぬ一と是
那とえふでうにかへじて成者。心とばくむる者

子を見て見ぬ教は身をかゝし身りかとくらすす
以て身も智ある。かゆくと見(さる)取とううう
ばえすは。而をとれとと(正よ)の多様をせがく
守る身のへかくちる。皆あまえう。機式を至らん
及ぶがふゆゆ時。もろしきをとすとて必機式の加
もうぬいてもぞ機式を有する人を全は刷く。色を
取りかへ原の底する。以意(ひの)色欲をもよひて
種をばくす。酒肉ふまたせんせうして無有てやむ
上より。偏もむかひ下より。見られて善ふほの福
をえれ。我身と他の物とと。自由ゆくほ主人々
徳の所。思

教せんとされ。他の方一みじま若一之上にほうへ
下さり重り。教る事か。傍らし。身へ人間は
生れたり思ひて。と知り。とゆ。名利と。き。里敵
をうち刀を。夢み核と。用ひ。と。手のすさハ
うほゆ。もうす。うづら。か。身と。か。事。秋め
花。め。がち。と。有。か。お。の。く。よ。無。は。か。か。の。世
き。う。し。そ。の。言。か。ー。と。思。ハ。て。開。ふ。座。と。あ。か。の
お。う。り。一。枝。の。花。を。ソ。リ。一。煙。の。香。と。紀。手。を。席
か。と。か。三。者。ま。み。か。か。と。し。五。公。ゆ。八。人の。向。来。
す。あ。う。も。い。よ。一。片。ま。も。の。道。す。か。よ。と。ち。役。
か。く。ま。よ。千。そ。こ。ド。る。か。の。ツ。リ。一。や。人。と。よ。り。
そ。き。物。な。う。ん。よ。一。山。林。ウ。セ。よ。い。く。て。丁。モ。ソ。リ。

ともこどり山の奥林の下。は。伊。と。も。名利の。ゆ。も。る
所。を。か。い。く。て。ク。ゆ。を。ク。タ。ま。し。ア。布。の。中。よ。も。の。
幻。す。御。色。必。不。出。え。う。ひ。年。河。あ。ら。と。か。魚。す。
あ。う。は。槍。ハ。き。う。つ。す。勝。ハ。佛。の。ま。よ。し。柳。ハ。サ。う。
花。ハ。ま。れ。あ。り。か。

房。す。ち。ぬ。も。ま。よ。か。を。あ。し。見。か。ゆ。の。幻。
見。れ。か。と。あ。り。ア。ヤ。ア。
御。も。世。の。中。の。を。た。く。見。や。人。ハ。幻。か。事。あ。あ。
く。志。の。ほ。う。ま。を。忘。て。世。よ。ま。ト。を。ま。て。さ。を。う。あ。
代。幣。と。し。革。の。物。も。と。免。免。く。と。ん。と。の。工。て。あ。
さ。か。る。幻。い。や。ま。し。夢。よ。ま。る。一。み。は。文。か。す。ぬ。き。
わ。す。れ。と。一。生。ハ。夢。幻。泡。影。を。す。と。知。り。は。ま。

京や同ゆまゝあと影しまる二年の印やあらば
勝手しりてかみ争ひたゞき中とも感激も
うとあはれ抜多くあれ皆和諧賀倍のいひ
めまたるすかのう多くは自ら足りましとあ
れ、サトアハ桃鳥を名すと子孫より傳へ
とが思ふやもよぢん

因書のやよ一期榮花よ不こうん事は思ひ立廢
歛。國はむひあはれほし。す。よ利欲をあさ
石室左剛とぬく身を成さうし。心といこよしめ
（あらえ）あふにつきくあさ不里をもひの御子。よほきて
うまくやむよしもあしうへも辛かうぬ稚か
うねやかくある心を捨てかかくに世とあるを

よあらはよもあつ物とよをみつづすいつやうな
くちあらまわしたとへあうて。も誰。よも
あうへき事のあ。と。袂とは。袖。よは。袂とな
ら。車て石。と。花。ハタ。の風。みさ。竹。を。れ。て。散。秋。の。れ
かく友を。し。詠。月。の。あ。う。つ。き。と。雲。よ。か。く。れ。む。う
見。かれ。し。人。と。か。せ。か。意。ハ。今。ハ。あ。う。も。も。な。し。ま。ろ。ひ
ひ。ぬ。う。れ。い。ひ。ま。う。の。笑。ハ。名。く。う。ち。ど。り。ハ。の。か。じ。地
遠。ゆ。う。う。年。の。あ。ゆ。け。も。あ。の。絶。か。く。す。る。ざ。り。い
も。そ。

きのふ。ハ。さ。か。た。め。よ。い。と。か。ニ。カ。ハ。又。附。る。う。へ
と。う。も。と。と。う。う。よ。静。す。る。い。と。み。か。く。多。底。の
差。作。を。争。い。我。慢。偏。私。の。風。五。六。七。八。く。づ。く。故。逸。

波見の波たぬ月とかしえば。舟いこはうみ舟を
てあむも波まゝいりむりん波かぬとあす人よ
あさうひみゆれさわさじせよるひのりかくとき
人のうき

○ 世の人物凡そ事の強は 飼取ひ多筋を
一よし死ねり入へりあすより生るゝ死るゝニツ一ツ
の境かれハ多くハ既就せきか可レハれ佛氣
ヨシカ一公不亂は人て即くも愚と譚力あるといカ
名四力の勢はよき手ハかしあれ多々ハ不孝は
てよる(かき自身とあるう時よ附んせばさり居した
日セモほともとゆめ一時よ起る。かく虎穴よ入

さんば虎みをねすとヤシの身と嫁の死也入る
事を説くよ生るかう人を多すロムの切らかば
善はつけ要はつけ多男の而も有し遂げきる
ときゆ日（きを多生）教くよりかうハヨクてうくも
あらまき世の通途の人萬（何）よの業（も）もあ
れ考（サ）ムナセレシ叶ハリと男（ア）狂（カ）メの上
あらざれ、何（ア）リテのうハリのそらよりの云（ク）
アレともりに世の特（ア）ミがちかれはして事（ア）
計（ア）リ（ア）ノハシ（ア）大（ア）リ（ア）高（ア）一（ア）とけ（ア）する（ア）
アレよりし英國（ア）在（ア）ト（ア）ヒの太平（ア）治（ア）ま
の民（ア）た（ア）り（ア）あ（ア）ト（ア）細（ア）キ（ア）タ（ア）シ（ア）の（ア）話（ア）と（ア）く（ア）

逆風よは進てほ地ほぢといひ方角かくも弁べんへくる天荒あまこうはの沖
サヌ漂うきい牆つきが引ひち船ふねが立たつ、船中ふねなかの荷物かもの持も量りょうと
少すくない投なげし聲こゑがきこえ、神かみよ佛ぶつよ祈ごめごうとこめ、布
乞ふきをひたす食く物ものを絶やち飲水おんすいを呑のじまく、あき
身みりよこむるウマ阴かげ、うなづきす、あきさねばになん
れ、夜よ一いつ日ひよ多おほ神かみ代しろ祓はらを祈ごうて、兩ふた手てをアザ
キ時とき、天あま陸りく照てるの日ひも、夜よ立ちまくらう、起きくら
多おほく、よもやあれ、いつともゆく、而がのみぬ、
而がともうれ、一ひとつア紀きの、鳥とり玉たま、ちる、所以ゆゑに、
もううし、八は丈じょう、路じゆす、もる、ウサギ、人ひと鳥とり、
漂うきる、もの、往むかる、所ところを、きけりよ、多おほ面おもて極きわて、陰かげ
を、一ひと脚き、山さんす、それ、夕ゆふ、余よあり、もくす、みの、

さく而ひよとどりてかしきふ。時々天よいにて而
水のみを希り火もハ未とどりてなく又未食か魚を
食料也かゝルハ一種のゆきも花を来ゆを幸ひよ
シ此とおもに生かす。五つ食ひて至る。
右方角は方角は妙うキツの花うちへあらゆて生
のひぢりあうれどもあらぬたまうを因船の人
海へ死んでしまはず。左より人乎てよな
くひ居する。十三年ある。アリ。又船
の主名は澤翁やう。身の本店は又はみはれ、大よ力が
ね且主船くづく方を思ふ。船主は舟物の船も
タゞ一隻す。さればシルヌドレシモ人ヒヤク年を
新よ船作らん。主をちうりてあり。此古多き

京本ノカニシトシレを作ル具ノアツキヤウシ
アツリヨモカムノ一偏ニキシラヨトタニキシテ
而モト日^ヒキシラヨカヘテ者ヨオサキリシレホス
破船ノ餉材カヒトナリ^{ハク}日^ヒヨモウヒ
アツメミモ古銭トロトシ^ハキニ^ハアツギキモキ
アツセモ多キモキ用トキシヤリ^ハ船ガ来シル
オ船ヲ食料吞水可んとモモカニ^ハモ万のム
ヒくシク^ハキ脚被^ハキモラ^ハムシイ^ハム^ハキ^ハ
アツシ^ハキ^ハモ人^ハのム^ハ一^ハシイ^ハム^ハシ^ハ人^ハある
主^ハ江利^ハと所謂^ハ一^ハム^ハ私^ハヨシ^ハミ^ハシ^ハ人^ハある
セ^ハ有^ハリ^ハ備^ハ主^ハモ^ハニ^ハケ^ハ而^ハの漂^ハ省^ハ人^ハす^ハあつま^ハし
國^ハ而^ハお達^ハシ^ハる^ハあ^ハ乃^ハ代^ハ人^ハナ^ハシ^ハ可^ハリ^ハも^ハ皆^ハ

夕中あつましくいひうつゝ行ふ毎も三四歩のまゝあは
ほよ一ツ物レヒシテさうひゆといひよりばせりハたて
かうとたゞ一途の船旅セリめでたす人住む
土地よもやんと思ふるのち化よ余危へかくをばと
ゆ大物の者をウ一品よみうたすし方のる事
はわよひ多思ひト而キモチケム事わせりカミタ
弟(拂)ハ夫と絶て重ねて帰りとも仰りてあは
ひ言の系紙の詳かにあらうり一人の挂言よ
えあはは太陽のち一はやうり挂よして主君の一
どきの所を回すもあま湯をたまうすはあは
死地へりくの一心を乱するをいふあるときす
れかしむ風をうむを初一人のまきをいひた

アキスの論へかれより学ぶる所ちれアインアウヒ
彼方罪を犯せし極悪人一輩一には多罪と仰
て連れがるゆゑを極かく又抑れを因ひ極すり
寧やかに押こめられしとあらまに又ちれども連れが
るから方敵つ者切れはとも廉へくされば搜
ふたりしてお底ハ面停つさうとモニ尺半とクレア
リテスナトト而め主ツアリとスイシテナヒルン自ウ
トリまくと云きとモ而め抑解ひゆをセア
あリとまくを多罪人ハ非常の剛強の者とは
為れたまよいテアリシテクハ向る事ナキヌと
セーといカニ彼ハ特ニヨ夜席多カくた
ソラヨモリセテナ何のうれがんと寢食も

志少モ思ひとあリて他すあし是とせする者、
廉きの内意と仰すいドメモ一ニシテハツニ
カツキとはやめく初うねハチ御りするモナシ
て彼経悪入ハシラヨリして連れがんと情一筋
シテキノモ思を易しあつ後とく左きつねふやる
あリと思フ子ナシかくして連とく左きつねふやる
廉きを被りてかゝるアリド、初ハシラヨリあ
ウス龍丸を金あれを善ヌラツシシキシ御
用ひかほいのよぢやと思ハリナリハル人セリカ
ニ業成ラぬといがモ其の厚すきを厚く云
が用ひかばだり義ナレルル、
アキスの事也

ぬ事や、ある事を考へ、一々よからずらもう川と
五左くすゆか、かまちもまこと業を多く務めず
欲求るが汚れ、豊衣美食の事多き、かくも中
上り冥福をむこううる神佛といふ。かども鬼神
の納豆ある至きや草を拂す人の桂力神氣ハ別
は有餘あると思ふ。

○ 箱ヶ東の内里の大師の宵禁、飯炊まで推いゆ
とるし歎、いくつ有りし、あれを、十日と十三
三日もありしきあれを九すの本具膳へかり人主極
く、上は白箸を一ついたし、持佛は佛が多れを
主たよりしと呼へりいうて、禮れとソノを知らぬ
もの大ぞしイ取る事多きを、かくも、かうじ御室と

往古ハ大海
日モ靈巣
シナリ観音
經已者葬
婆三姓來ル
十六度アリ
七月固ヨリ
十二月晦日
時未ノ宵
朔日卯辰辰
ルト見ヘキ
和泉式部
歌ヲ危
人の事お
トヅケニ居
居や玉山
の里
枕の草紙
ムカツツ
世戸智人の食
物をあくま
兼ねの時代
モヤサぬ事
アリまほ
人の居事ヤ

初めキレ思ひ立テ、片もいり御りんも勤リす
キ此第好清師の法門、身と心とおぬしきうつ
クハリトモ物びとあれあれテ、院もテの夜
アーリテタウヨ、またカヌ時、キテテ、おもくよ者
かく御ぬるトモ身の名前、乞ふもこれ如た人の
手に灰と玉まつりて、此の比都の御也と
あつまつて、松竹院のタキミチの御、帝靈
御、かくして、時日市ノタキミチの御、帝靈
のめ、ある事、ある在ありて、と思ひあらん、四
五百年前の事者、御ともせしとく、見へて、
監鷲ハ、何よ、と起りて、すよ、かく人、知るゆ
すもと、ぬ(し)

（もと）卯の事の夜見かせり（れ）「あゝ（は）」

○ 寶鑑堂藏版豊太閤真蹟日記といふ書や（も）あら一條（ち）

一
かくことあるてよかつ
ほけんとあともせ
よきとうつかうてよくさ
ふゆ年（とし）のものと
ゆくとゆくとゆく

このせつとひやく
よしよしすよるて
とすまへ

正徳軍士等（の）あせしよもや元（の）勝敗（の）其志（の）卦（くわい）
所（の）援急（あいじき）勝（し）負（ひ）負（ひ）（まくすか）勇氣（ゆうぎ）す一
切（あら）が少（すくな）い勝（し）負（ひ）（まくすか）勇氣（ゆうぎ）す一
切（あら）が少（すくな）い勝（し）負（ひ）（まくすか）勇氣（ゆうぎ）す一
切（あら）が少（すくな）い勝（し）負（ひ）（まくすか）勇氣（ゆうぎ）す一

敵にて勝利をねりて、みせ我の毛非の勝すもと
か、彼言ひて、主て佯り負て陣となりて、
手をもあらずして、あれをたおすて、初夏を勝つといふ
とあり。又、寛大の所からし勝て負くらうが、
偏狹からぬか。あれ勝たるやうは、見ても負たる
か。皆是れ方のよりといふ所ある。され軍の
事のをかうに、今日世を憂むる。向已うすゆの
事あり。すゞ、固トドク。然夕他と座接つ洞よしあるす
と思ひて、車の前後とのへり見ほして、一途々遙
んとするの志厚く。必ず成るねすある。ましきれ
則勝の理あり。然すりしもせいで、もとから心もとば
きの。かきかう。又、き負ひたる。太平の民の皆

此處ちうが中、豪傑、豪傑なり。、とぞも多き。
夫真て勝の勢者か。あれ先の愚と早く凡き
うか。勝て負ひの馬假者か。身の程を知り
す先テの五手の利鉢を見かねば。不、無理押
は手筋混の理屈をいひ。詫ひをあれ識者のみよ
ク。あらわ者と見かねれど自身。十手の勝た
ク。思ひ。あまき人か。豊太閤の
宏量遠大なる帝と仰て、人の戒められ
じと見へた。あれど今日の事書の上の事か。
と感する所あれど秋氣の佳序であらざれば
咲ひ常ひ。又、移ちれど、
伏夏再び。すこは偏在す

丁卯季夏和之これ
秋餘了天政改元

○昔蘭化先生序ニ先キテ「レ」造化ノ恩五得ノ物
ミテヨリアリ政羅已ウカヘル瑪泥並トシカハ「大國」
一トモ多キハ教万民ト開カ地多ク至地り山多ク
倍ヒキテ井泉ナリ土人シテレニ汲ムテ煎煉ヒテ塩
ヲ製し食用ヒ而オシテ満塗ニ異可トニヒシキヨ
クモ満多トシの蓮粉ト付シテ主用足ルト
秋那ハトキ五湖ニ環ス。島國而キタル湖而キ
所處國カトナシテは湖多シ。食塩ニ蓮蓬の屋キ
ミ訴リトマサセハ倍ヒツメ。故く巴ウムナニ
ナシ味喰リ止カ未トシ。トシタム。おアムトモ
國人ツバシ。トアリテ思ひ合セテ。初文化ウ
モ一ツ秋漂人。魯西亞トシ歸船セシム。諸々

少くニ多國の封内ナリ。而テ山海の力所至リ
土人多くハ石を用シ殊ニ正白里といハ加古川口
けく湖ニ達シ陸地の内而シ怪井あり。主用ヒキ
ス經歴セシ蓮粉トシ多一地也。己ニシト社キモ
シ異ナシ。多角形。彼廣大の國土あれ。左也
有。一トモ蘭化ヲ神ニ加思ひ左也。左也固ナリ
本邦カシナ。ある風ナシハ那ナと思ひ。左也
左也。左也。左也。左也。左也。左也。左也。左也。
鹽四十八石。後。鹽政局。山田郡。浮元。
津伊郡。月輪庄。大塙の里。左也。左也。左也。
左也。左也。左也。左也。左也。左也。左也。

ヨ一元あり。日石の元より元修の地を生す。一村多す。
地と食事。酒税の累也。正月に西行。酒师の舟
酒士ひかく浦向ににて。陸奥の山。川。木。大。山
の里。甲斐の国。は。酒。あ。し。テ。れ。ビ。古。牛。集。よ。あ。あ。み。
山。コ。一。牛。の。株。と。エ。免。る。石。コ。リ。酒。牛。と。リ。テ。酒。牛。
種。毛。多。一。チ。ニ。又。越。ほ。國。よ。ハ。酒。川。村。ち。く。山。種。と。
カ。モ。と。ソ。ノ。現。多。國。人。の。茅。セ。ト。名。寄。と。ソ。カ。多。御。刀。
ア。リ。シ。ヨ。卷。九。水。の。郡。よ。酒。井。レ。ソ。條。多。酒。井。南。國。
よ。往。エ。古。れ。ア。リ。古。高。声。郡。朽。尾。所。内。道。石。村。よ。激。の。湧。
ホ。リ。井。あ。リ。子。三。島。郡。不。勝。坂。村。の。内。酒。入。村。の。根。
の。山。岸。海。水。の。四。よ。塙。井。あ。リ。旱。の。时。市。其。缺。し。
行。續。く。而。日。暮。は。味。淡。し。早。歸。の。家。の。食。料。と。し。高。

利益あり。又茶湯は服用て良し。蒲原郡菅名庄下條
村の山崖邊沢と稱す。まゝ圍のサヌカセ大方許源
の湧かり而至る處つゝと考も味を。鰐ノ子近
附三島郡興板直江氏古城跡の山腹の激涌也。所
に見ゆ。又右毛郡朽鹿城底の内桂川村より塙井
あり。高鰐一堵合ハナニケ村あり。又魚沼郡新保村名
主赤坂門。宅地より嘉保十六年申の事不景佐井也。其
主多一毛也。もうまう間の石よしで溝を止め。又主上
北毛主多毛と呼うば引つつき湧出しなる。又紹熙
れの國毛山根と云。鰐水と呼す。地名とは見ゆた
本國の外毛河より出でて有れば五那主坐の
地とぞ。内毛河より出でて有れば五那主坐の

○ 金秉中字は水晶石とも三角の柱石なり。園内を抱き
の有られと量り見て三丈四寸ありと天を據く
をうへ見り詳々金秉中記の泥壁の石の體
ふすまの處をとは見えずと思ひて噴。石亭の雲根
が後編を見たよか世金沢城本水の物やうと記
ある。越中國祖の源と以て形とニ元を立架山
ソク西阿寺高能而して帝の御来ある而すありす
柳門より流羅又多モ者と云ふ左より而多く
河西の天柱石といふ大石を主在の周八洞に大父
夫の夢と貫て修復へ多びて妙なる也然す口巨大
ヨリて一本立せり大石なり。

怪石傳曰却化國中天空ニ屬國也有石柱高七十尺

之園水鼎石及至くもあらぬかかる。深山幽谷の洞
から高大の柱石至りより。又曰立架山。従昔し大板
石。信記とソノ説本。見ゆ程年号等諸事メ語本
家の處人中西ス逃れ居り立架立教と営する。立架山
ソソガ高時處人作立架。立架二似也。
江州琵琶湖中は沖立石といふ立形構つてく色
白く長さ百尺と云はれ申すある。而して立架
太ナ指ワニし立尺許。立エ雲根を後編み見ゆ

爰の立涉眼高室見林

江戸の方に之有幕を鬻く家の元祖也慶忠平中湯
島天神の内す。おいて創業し万治二年日本橋通二
所目。開店。一ノ年。改元。百五十年。本統。慶

長ノ一かじノ几ハ凡ニ百十年第ニ及バ

國家年事多集々見えたり

○城州愛宕辭 清水瀧

桓武天皇延暦十七年戊寅田村麻呂造清水寺
秋雨もびひてれクももつけてせんくすめゆふく
れし桐木わく

○秋茄子石勝又曉ノ曉ノもかしふア修メタヒトシ
叶乎何ヲ比ヒテ哀モソリ定ムハ有リハニ内ノウ
クモハ早酒ア禮モレ新酒ア初モカア伊呂波家
義物ノ醸ワサヘト御シ酒未濃也ト序セリ常用
集醸早酒也

○蠹魚立毛句之一花亭老人

剗訛紡織近代書末未投典老饑莫莫嘯文字渾無味猶
是古入糟粕餘笑罵極妙

○阿蘭陀後漢西域傳奄蔡國故一一一

○清夜錄范文正公鎮鉄塘兵官皆被薦獨巡檢蘇麟不見
錄乃獻詩云近水樓臺先得月向陽花木易為春公即薦

王

李白贈韋長宰詩窺日畏衡山促酒喜得月王阮詩野曠
易得月谷虛常帶烟 古見佩文齋韻府

○仙臺庖厨ノアヌク料理 一野布須間

生貝耳と取薄ノ魚子湯とかけ乾し板ト奥捨身と
付多上ル多松身玉子 取合モ升モ凡ニ三枚

芥敷、内右名をじ多々酒後出鱈を入らる

セナ

一セシムヨシル

ミシムヌカニル、日あらちシムヌミザン葉をヘル

一ケリミシムヌカニラシテ中、カニ由但

三高脚ミシムヌハソリミシムヌカニシマシ可ミ

ミ外

○ 鉤七杖箇之道也、鉤ハ曲也懸物者也又引來曰鉤昂カ
キナリセハ匙也大箆也說文所以用取食云、杖岐枝
木也ニタノサシタル枝木ナリ又収艸具ナリト見ニレハ
楸袋竹把竹把ノ柳キモノナリ箇ハ杓也ト註セリ水

石ヲ汲取ルモノニテ水杓鉄杓銅杓木杓ト見エルナリ古人
此四種ノ文字熟用ノアリシナルヘシ乃コノ四物ヲ中西
氏草木炭石ニ辟言ヘシナリ胃ハ水缸ノ如レ水缸中ニ
一拳石ヲ投スルモノハ夫石ヲ志ント謀ルニ鉤七杖箇
ヲ用フルハ其道ニメ此即草木炭石ヲ與フベキノ術ナリ
邪ハ本ト胃中ニ取ムキモノニアラズシカレハコレヲ
祛キ去ルニハ草木炭石ヲ投スヘキナリ既去夫石則
水必減矣トハ祐夫邪則精必虛矣コノ時ニ當テハ鉤
七杖箇猶草木炭石ヲ能ク加フル所ニアラス昂穀
肉果菜ヲ以テセサレハ其減シタル水ハ養ヒ加フル
能ワストイフクト見ユ虚實全篇ヲ通讀ノ自ラ分明
ナリ

右アル人ノ向ニ答フ

○ 說卦傳

觀變於陰陽。而立卦。發揮於剛柔。而生爻。和順於道德。而理於義。窮理尽性。以至於命。

註和順從性。无所乖逆。統言之也。理謂隨事得其條理。析言之也。窮天下之理。尽人物之性。而合於天道。此

聖人作易之極功也。

宋儒の窮理を主張し論を立る。此說卦傳より出る。家と引きて、あれ天地自然ある。さ若の事理と窮め人物の性と居て、多天の在り。かくして、もとより人生ときこの内世々近ぢる西洋の学と、事理を以ていひゆす。宋儒の窮理と稱せり。とて、あればあらず。呼べり。これ彼國云のナチュエル

キレジケ、ウエーテンシカップ。ハ人物の性と窮るのこよりあり。は體ハ人物モリハ眼ハ視る理耳。聽くの理といふむすりよりあり。眼ハ天造モ六膜三液を具へ。而れよ觸り。物内充透徹の物。是昭映する。と以て視り。といひ理あり。而れ先づ其内景を剖り。開き見し後其象據の理ある。とぞ知る。至ふれ。と初より。是自然の。具能もし。而くと見窮り。多理を恃む。かく。第一。眼ハ看官より。視る。多理ある。と。之を定む。あり。は。こハ真実。證照の窮理。かく。一身具備の物と。妙多窮り。多當あれ。例す。多獸。衆象も皆然。又。一章一本といふ。と。各國の天度と。地の寒暖。を傳る。

を第一とし彼ハ山よ生レ甚ハ傍よ生レ彼ハ高燥
傍地の限リ生レ片々卑濕の處よ放シ山を生
タの程カツヒシナリトナリ夫實價ニハ油氣存モ
メテモナリ諸物ト互モタリチカんドシナリヨ
セと說ニ第モ其各種岩石リ性也トカキツキ程
ト知ルカツアルノ居くキモチ程を窮み初ル
而リ候く彼ニテハ自然ト形象を取セラフサ
ほモ知ルトモ天文星象の事ヨアリトバヒル
之モ者ヤモリ推レ毫毛先人ナリ手ヲ觸
通キシ給日ヨ見ウツ無キ不ヒツ者の諸々の偶物
金石草木一切至原と根究モ。ウニ此蒙セテ十
左一ル五レシケト稱すシヨ蘭化翁ハ本然學と得

セリウエイテレカツノモ初らる魚キ碧乃像理
居く知リ窮タの夢トリハ魚キシムニナレハ源土
聖哲のヤアモニ。第瑠奈儒の稱モリ窮理カ
多面ハ安南一リシキウレ粗漏の夢者海人の稱セ
タ窮理カ妄義正也。所謂吹声の蘭室社事
ミテヨ。窮理トロクナリハアリ。至妙モニ
極ナ西々方

○本道薩麻記。和氣丹波之一流謂之本道。見元康
富記。本道之部。入ら。ヒヒノ。見え
有。醫流。門科。外科。鼻。内科。本
道。ソハ。西キ。本道。ソハ。本多。道理。

○計指セ。谷川淡舟統々

○僧元政 日政家ハエ男はカニ
徳正也 お詳りアリ候
深州ニ隱遁シ地を占め瑞光寺と名シ
花顛あり人乃もレシムく上人自身にかこかんからて
書後ノ日記のはーと主ある事御平生とある

十三日書和哥懷紙 草紙ヲコレヘルトテ紙ヲ折ル
一僧前ニ在リ其僧コレヘ給リ候ヘ折リ申サシト
イフ予カ目是モ修行ナリ心ガラヒガニヌヤウリ
スレハロノニナルノ云ニアラ大心モ正シクナルナリ
手ヲ以テスルトハ是ニヤギラズ何事モウルハシ
カラヌモノナリ戸ノアケタテモ鳴ラヌヤウクニ
ラツケハキモノアヌクモユガニヌアリスルハ

見聞ノヨカラニタメニアラズ心ヲオサムシタメナリ
見聞ノタメニスルハ甚シキ時ハニコトノ業ニモナルベ
キナリ心ノタメニスルハ只是佛道ノ因イシナリ日夜ニ
ナス所善事トイヘビサナガラ惡業トモナルナリサラ
ヌコトモ又功德善業トモナルナリ心ヲツシキト
心何事も修業ニナラスナハナレ物ヲニツニスルハ皆
根本ニモトヅカヌ故ナリ

○伴蒿蹊曰丈何と而をもよ聞かりしハいと亦あ
他によ勤りし徳乃聞えある人甚多く長ト在る人百五
ゆ妙手かどハ有レヤシシキとせが相見を補ト
橋氏の西東遊記よりれども「釋」よ覺ゆ
○我質居のう時杉田大人の物語れしと記し置るハ

廢をうれしとあつ頃、時人はを閑して老来左岸の
チ通すや娘めり走りの足聲をねた水の左より抄す
但廢置のよしより左よりすや

○ 芳洲兩森氏名誠清字伯陽通稱東山序木下順菴の門
よ進く新井白石室鳩巢板園南海の諸先と英よ名が
天下に成せり京師乃人よ一し對馬乃文學と有り漸
よ昇進を肴とよくして唐肴韓肴とひよ通じ韓人
此翁と詠じて云三國の肴のうちよりあもしよ日本よ
一といへり折りより支々これよく異邦の肴其國人
よ彷彿するを知りて驚矣め頗佛かれが日送方
政治の即と有るヒテヨリとあん近半上木せる橘道
房詫くもれくあひてしたる一時消閒比極齊といふ

舊來所狀亦復如故。內卦易之。諸猶子
和。而每見其夢。猶歸國。而至。卒。由。放。龜。
片。而。奉。事。有。多。甘。尤。不。亦。幼。新。第。而。不。存。正。事。

事度々、や往作らるる事不都、而上京以候る所
種事外の夢、由宇バ多が、而上を、闇、椎、春
有物至る色に詩を、做多、看多、商量多、とヤハ免
角多、而作、以上手、仰聞、トナレ、商量の事先ツハ
人トお詫毛る事をヤホーとめ大、とお詫いしたキ、
タクハ多々以心、向心、秋心、思慕する事をも
商景、とヤハ、物語よも人、トヤ奉、以義、思慕つゝ
由色多可ヤ、とヤ、時、待、秋、角量、回詫、とヤヒ、教、川
二一をヤ、相、ト、下、由元、仰、追、身、ヤ、一時、の、仰
株、移、と、な、め、つ、い、の、詫、作、ヤ、と、も、上方、すくはつ
り、く、由、解、る、參、セ、ぐ、く、由、半、ト、丸、左、和、穀、を、バ
は不、ヤ、レ、由、差、思、玉、中、仰、ヨ、キ、由、由、左、右、

まへとやせても可はれり多え事ゆを先。教と滿
教ゆ。由是す右千遍讀誦能行ひ。歌とよみく、
至りし心よやせ。是の事。已能かゆけと
支てり。分別。やせん。をさしりとハ御う事。やせ、
ありし。私最取子也。向よ。多ある者。よも。なく。ともゆく
以て死と侍。モ一章。ゆき。とあ。幸。やせ。と。有皆
被。ゆ。や。事。タ。所。也。度。お。も。難。と。多。じ。よ。あ。く。ら
ゆ。ゆ。れ。宋。江。か。と。上。承。ゆ。ギ。由。安。桂。洲。承。大。愚。院
岱。第。序。固。左。し。市。画。レ。而。烏。房。之。ア。リ。セ。名。市。院。之。队
シ。不。事。移。レ。中。名。寺。リ。由。安。山。レ。レ。有。寺。雅。御。系。
及。黄。毫。行。勵。社。は。首。レ。人。酒。モ

六月十四日

白雲山房詩集

聖教主紀

新秀陵唐尚長元
和之四翠山巖毛元

文一通

家有清れ乍尔至而拘詠仕其先以新家事務歸而
遠移し由仰應片事トシ。其有、家有家事務者、而詠
事不く方久カタクニ。も安逸アヒヤをし因す。お門内ウムシに左川
舞モロコシらう。此處シテの音響ヨウエイは古久カタクニとヤシ。歌ウタよ与ヨシ鶯ヨシ左
竹タケ。とも元ハタケ不才ハタケし。上老シテシテは。而作シテ。也半ハタケを少ハタケ
也ハタケ。歌ウタよ寺ヒラタと云ヒラタり。自己オノの事モノと云ヒラタ。謙遜ヒラタ也
。傍ヒラタあかくヒラタり。古久カタクニのあハタケ。トは。足ヒラタく。也
元ハタケ。ナハタケ。事モノの時ハタケ。千遍ハタケ教ハタケ。多ハタケシヤ。而取ハタケ。立
て。千遍ハタケ讀ハタケ。ニ年ハタケ。且ハタケ。お附ハタケ。一多ハタケ首ハタケ。お手ハタケ。こハタケ
うハタケ。仕ハタケ。又ハタケ。八十ハタケ。七月ハタケ。よ千遍ハタケの教滿ハタケ。と
遍讀ハタケ。二年ハタケ。リ。且ハタケ。多ハタケ附ハタケ。一方ハタケ。多ハタケ年ハタケ。こハタケ。うハタケ。仕
舞ハタケ。トある。と。ナハタケ。あり。トハタケ。みは。う。わ。れ。トハタケ。ハ。ナハタケ。に。の

七月すしの積りよりあましにわくよはぐく
業(業)事(事)二年ふく干遍讀ハ滿ちをれ、あ一拳首を
亦二三年かく経トある年廢(廢)はぬりかくのとし
翁(翁)の又と年數極(極)きる有る是(是)方久乃とかと疑あれ
ど金く自己ヤ児の因機活法を見、因翁(翁)ある
のと内(内)ト
和(和)原(原)友(友)多(多)ヒハヤカ(カ)トアリ(アリ)ヒト
ゆキ(ゆキ)ヒ(ヒ)敵(敵)アヌ不(不)及(及)乎(フ)アリ(アリ)ヒ
東(東)不(不)佑(佑)但(但)老(老)技(技)の消(消)遣(遣)と高(高)もすもかく(カク)
行(行)ま(ま)てウ(ウ)薄(薄)き(き)く(く)自己(自己)の事(事)アヌ和(和)為(為)様(様)
ガ久(久)とい(い)アヌあり(アヌ)あり(アヌ)モ妙(妙)シ
ゆ(ゆ)縄(縄)ゆ(ゆ)廣(廣)れ(れ)ル(ル)一月(月)ヌ一月(月)アヌ
仕(仕)アヌ和(和)者(者)ヒハ射(射)者(者)アヌ
アヌアヌの(の)妙(妙)者(者)アヌ
アヌシモ老人(老人)ハ役(役)ヌ立(立)タヤヒシテ
仰(仰)奉(奉)まづれ(まづれ)まづく
一族(一族)園(園)与(与)方(方)ハ所(所)傍(傍)橘(橘)庵(庵)翁(翁)ハ彼(彼)方(方)ナムめ頭(頭)也

○ナキ外彼方へ書狀を一とどめ奉候事あつし老人
のゆゑ在在り病氣仰と承り申す。身何とも康健
不康健と奉彼方知浦(ひぬか)御乗じてと是
等の故事年ヤナ(立候よき年)奉山事も不仕
若を中途より落沉仕事か何とも与一車也當不
な後候とお詫在在せ。一ウカツクじゆた年比
而書跡の傍不字は也。今去奉接上セ。是ハ
是の御禮五六十もせぬ。ゆゑに承言い
至幸。おも(不ヤレ)。御奉事ヤナ。才亦是を
車山(車山)へ立年よし。書狀亦禱。車船
第一也第、在者略片但御懐表事御情を因
遠在あと成可トテ再拜誓首謹此不候

三月三日

雨森東立亭誠清

○三秀院光大和尚祀坐下(私云翠巒堂モ考矣)
ゆくし易簣。八十八事の四月六日とぞ先。舉。僧尼の
豪富。つみ堂宇の建立。本住。寺庭の力を用うれ。中叶
老け。蒙被。又桂をへらル。しも畢竟。回。く。秋。と。居
し。天。地。の。因。の。因。の。因。の。因。の。因。の。因。の。因。
あり。人。も。亦。中。心。を。写。く。身。記。あれ。と。せ。れ。り。ノ
た。ハ。意。草。上。 極。秀。

○た。ハ。意。草。上。 極。秀。
た。ハ。意。草。上。 極。秀。
た。ハ。意。草。上。 極。秀。
た。ハ。意。草。上。 極。秀。

人の庭の訓とと思へりとたく火燒めやすつこ
候々か

湯元複批固

千古今
一揆
之記源の所も以見り。智慧をもんといつてす。
ひつゝ世。もも行ひ事。やもく智慧ある人。いづる。す。
用。ゆる。よ。少。智慧ある人。いづれ。世。とも。すく。か
れ。も智慧ある人の。が。多。行。れ。す。宜。か。かく
無。む。甚。き。あ。

虚調。諫。と。用。り。す。稅。芻。を。ま。セ。一。羣。人。歸。及。そ。と
漢。史。に。記。せ。る。と。見。て。感。し。此。事。と。作。竹。を。れ
タ。此。多。高。を。か。七。毫。と。胸。く。の。も。り。め。ち。も。る。也
也。の。中。の。お。も。ち。也。とい。や。ー。き。因。み。以。る。誠。み。道。か
か。る。詔。を。す。十。都。あ。り。て。り。い。か。ク。考。れ。、。五。國。立。す。

ま。り。か。く。中。國。あ。り。て。夷。狄。か。け。れ。、。生。育。の。き。あ。ま。す
か。う。も。畜。財。善。用。を。も。し。め。大。事。小。事。す。よ。堂。車
今。す。無。し。國。か。更。ま。と。い。や。ー。き。と。は。辰。ふ。小。人の。多。さ
サ。す。と。凡。俗。の。よ。ー。あ。ー。み。こ。そ。ど。る。(ま。中。國。よ。生。れ。た)
ト。て。わ。こ。り。一。た。す。非。す。大。夷。狄。ふ。生。れ。き。)と。モ。躬。毛
き。す。非。す。お。か。り。ち。る。人。ハ。い。か。う。か。と。い。か。う。か。と。仰。す
人。の。い。ち。す。お。か。り。ち。る。人。ハ。い。か。う。か。と。い。か。う。か。と。仰。す
國。と。中。國。か。う。と。い。こ。ん。と。ほ。す。と。よ。ハ。あ。る。よ。し
多。ろ。こ。ー。事。と。第。ハ。ト。考。議。も。る。財。か。の。よ。め。河。思。ハ。多
ヤ。ツ。ツ。ハ。上。て。を。う。く。う。く。財。見。金。セ。年。か。く。も。る。ヤ。よ
秋。ひ。く。思。ひ。作。る。か。れ。と。か。う。ち。ら。も。る。人。ソ。シ。カ。ヒ。よ
大。か。い。作。さ。タ。す。也。と。う。ミ。り。ひ。く。退。く。も。ウ。カ。リ。名。あ。

々人も物と坐てひさして思ひうるほりすといふときあ
やあり（きあれば會議は似たれど其実ハ會議はあり
ずもろこしと當ひて名其思ひうるを書つてある
やうな事なまゆりて冗談といつてゐるが、輕きまき
を考へ多の移をもじ重きと云ふも一定の法とす
物の長さより刀をもじひとつ斬拵らばゆく
されば方よつて刀をもじひどく斬拵らばゆく
也（う）ある所見してよき声をもつておけり
あると見てか（こ見をもじか）こと所歎くもあつて意
いにをと歎くまも（あれとおわたりあるゆりしか
）ことと歎くこそ恨むくおもろ／＼れ

- 丈餘の拔萃他日以前すテ茂質廿二三の時 師
塾はあくたゞれ草写を湯浸共 批評せらる
書は見えず）當時貞子は佛を易塾漫游中
（不寫し矣）因（そ）て序文は再写す（已卯年
の仲秋か）
- 俗人の奇書拔萃一文 漢人と失（いた）却人比
序の嘉善（よしよし）に（これ）か（れ）數せんか
似く（こし）むおもひをめし（く）るらん
（きのうのち）（く）れ（か）（れ）（か）（れ）
- 中國描談と題する一巻を唐代繪記（う）見せ
られ若耶（よし）も地獄と神（かみ）と在（あ）るやられ
在（あ）れ（れ）（れ）（れ）（れ）（れ）（れ）

本邦大承七年按ニヒ西後柏原天皇ノ朝將軍義晴
時ナリ文政二年己卯ニテ貞百九十四
年トナル明世宗嘉四月朔防卅土行商宗設執于筆於
杭州之市館ヒ五日初條ヲニ極共大慶運轉之輔南
北土名依所見ニ一聯地球ヲ論タル梅ア杜撰ノ粗
詮ナリ取用ヘキモノニアラズ

○一生のうちあ多ふあらまわ／＼うん王のすい
つれりまするとく思ひくらむて第一つと御
書し足く多か吾思ひ捲て一章以上だけも書
一日のうちにあましきのとくあらんや／＼少し
のまさらんとやりとかせむをかをばすまし
方すがいすす書きし何かとくをもしとひま
めちてハ一言もかず書きし

○人いきよみかすく國に字
ひ見るもりらふゆ
人を絶忘め君刀を右
不見且柳の口かわも

黄手書にてて至る一聯を見た中聯句の人の
作矣唐初纂要に見たりア

○

羽倉竹焉

春滿阿彌万磨とまゐる

妹の荷田翁称羽鳥を氏とも若南稻翁の祠宮
がを主として自ら國家の復古を任とする神代萬
葉集すわいく豪傑と歎せし(新神と時を曰いて
れすも元録年間ハ諸侯復古の運すあつたる
時として國學を唱ひ其聲附と申稱す)

因名に避

在滿 春滿乃物也

因しく國學を唱ひ大嘗唐具釋因使蒙かと著
す年代を失ひ行年不詳して多考索の明かる
めあらはれぬること國學より某の君の仕
へ(ウカナシ)福と稱して其の後を承継して稱る
其子御凡

通名 東飛豪學と嗣て江府すあり 妻弟

民み

五右文を號す事をもとみく因しく教授す

高麗

姓川義縣主

周鄰博士と名うたはしめ三枝といひ遠州濱唐の
人妻満よ徳の豪傑のとくして京師み学ひと年あ
り掌院く江府下り大よ古豪が唱ひ妻満云こ
正洞す及りては一めで万葉の風をすみうは丈
豪の士左兵衛と傳くま一家と聞し世の耳目とお
どろくす往い多ひ多一をの後ひ聲やの新鸞
あづれといふしく極近くさみ程行ひと云ふと
仰一ツ(大)人(妻満)年のみうそりゆるか

1

弓方は楫五魚をも由り著述あり世有る筆え
人なり わばまほ暖り著るよ思えア

卷之三十一

海東道を八日下し五日上り候乃江口守
伊勢人志兵衛御門守可祐
即ち

切竟

萬世誰不欽仰歎慕其風采哉
山の空いゝ山上憶良の極か
をめこやとむかカム（ま）万世よ神德カミタケ（ま）
名カミ（ま）をめくはしてとすめると正妙セカニ也

如意

鳴平大夫當原ニ第ニ必也垂仰名旌千載之下豈
可與草木同朽哉

山の左寄万葉集アムカツトソシセヨ三尺オの時
因難伊勢ノ辻在ニ序ト多ニヨサマト数年ノ後集
中と搜尋して第十九巻ニナシテいづく惜也と
庵モリ祠トシカヘ左れハ左代貢賢ノ主ニ秀ト
乞りて一抱をあしミムス松モチキナセ九乃寺の仲
程病甲ニテリヨナシ即モよ逃ガ哥ヒ左モヒ
差フ所モ有ルモヤ

○大坂物語トシカ印本ニ書栗本簷刑トシ借レ左
ウルナシトシ大坂名夏序碑ニテ序碑レモ天下
轟騰帝一統ムニ連シテモノの紀事ムニ寛文十

ニ主ホガ板ニシテ熟蒙左三右馬モ至日板ナ大坂爲
株元和元年アリ寛文十二年ナシテ廿八年ニ有ル明
三江戸大火の後文政二年己卯ナシテ百四十八年ある
後十の年アリ原古朱子記也。此多ニ叶板ナ世上ニ流布シ漫滅
一在る及元録也。年多大坂ノ吉律秀左卒モ東門再刊
行セリ。序書ナシ叶板ナシ。因シ但馬ノ叶板種ノ萬ヨウ
物也。キシナカナ。あうれ左人形ナ豆物也。萬ヨウ
ヨソナリ。而シナカナ。板行ナシ。ソレ純板ナ
禁ナシ。序也。ナシ。絶セシ。家業トす。ナシ。ナホ。院
頭帳も。落葉帝日一枚。碧ナ傳奇幻怪ナ板ナ
一額三千七百越前大將 一月三千板平號前

一岡

廿五

松平陸奥守 以下略
勤十人の名す

（辛）五左首敵一万四千六百九十七とあり

磐水先生隨筆卷之十六

○消遣隨筆第參

高溪曰並河天民緯亮字簡亮昂通名と云誠所五一
崇寧永文仁廟門人立畿內志の作者後伊至三島又傳主
の弟城南島田橫大兵
の人自丹波と書々ハ其平國紙為人贊才秀比
丈文類句國家との如はしらへんと見記
あり國文のあら化すありて至文と左に掲く

かゝりをされ記

七八じつにあま山の木やうをあぐらの足
乃からうるるのにすぢびて神社の御事
牛の角といふさたりんとうかまつるの

ちざとぞい川まゝへかゝそぎともいぬあるはかは
を本よりか度厚の神主せうもきまゝチ本内
みうちきとゆとづめる木のもくねう／＼よをきた
れもかゝらずとないのゆるおちづ（これハちづ）木
といかとはづがあもキ本ヒハツカクつを本も丸
さ本が三尺四尺ばかりみさうである。三ツ五ツは
ウチを紀。間々横々手ててたる物とぞいぬは
る鰐魚やうのかくもくしたまはかたを本と
シカチ本鰐魚ノカク一物ニありて延喜式ニ本
鰐魚本テリはかくしてあるし童れももアケチ
ルちあまよやうて此ニツメ本枝葉れをもくやう
ニ見へ侍るは内かみかをれどり折參れあーかと

お侍をかえよつうてお侍うめとあらまほく
人よたつま侍れ。色よもいかあるみをとててろ
ねねととくをせぢがもの中。も是は仰乃知か
えことひりや侍りに上つたる古ノ代子の人
ゆすか用事ゆすくかくからういはゞ、あじや
うなうるはよま言づくめゆふかくあ免せ下あ
くのもすのこまれあがの侍あくとてこかうらちが
やかどもお風しゆ風しゆい戸りそらゆよるた
ま乃くえの生えりとおとくほくきてかく。片の人
乃くえの生えりとおとくほくきてかく。片の人
神社のうつを本かよからべるすがこしたるま
す。田舎の人をもくわうはたゞくといゆる先

而くとは本根ぬいのはりま乃ちを晦しあら
も重刻て兩巻移置にくちはりきくやまのこを
がおサトウあればうあらは是とぞおくまかし
ゆえりゆるより程をのくこちをのこしてくりと本と
う拂ふしり程をのくこちをのこしてくりと本と
いひることせとこれうどゆとあれうとま車
あくち本とリカキのを又またあれうとま車
や室奉本記といか方きカミのちぎの智義
アリチヒソカドリはドリて内年のかは内を能
外をよ陰陽のうちをめにてなる而ぞ何んこれ
のやうおとこりをもと付るもあす（よ多う言
さけり）めぐまとりきこえたりはとくゆく一言

根の先ほとする木といひをみずうとすむおちづの
木を枝といひてゆくをえく田舎人は金葉の木といひ
日本うちあをセム人り多御^レ傳とあをセ佛がを
クもよ似れどく^レ名ばく^レモヤシまはこの承り
あまうとゆすりをうへ謂うちあく^レたる代^レ
のをゆく浦しもかくやれう（アカ）をうえ
毛めちかうちよかよりかみそののめひととせ事
せする古^レの風向^レをねせれこへてそ子と松
皮かけるよも神の神^レはヰ木とゆうけある。あ
をくにわのばくうをくつあをうりこくのはくめ
クとのをうしてゆまくへたる後ハやうあ丈よく
ねことぞいがきうのとくやモこーくまの車

やうりうれど中臣の孫の室桓かとしきをち
チ本も初めて三つゝ度あり「かよ仕事」といへる「皇
居」の「わゆ」の「わゆ」と「やく」もさよ「お作りたてらま
でりつくるよさゆを切支つらひきを。辭どと
室桓城とし、たゞの宮戸かもうやかすよまれて
う力きわまきをねほくまききはさよりうと
のひきるをぞちかすよつらぬじいざーたらん田舎
の里もあれなどり山のはーやがくきすよ木を
竹をあじ五しをく今をも左よもーあ波(まきご)
りやう乃拘(く)らうらはねほひじても内うゑひ病
つゝれ見るかわあじと木へ入るひるとよ、左

根のやうにもいひてウツルんあ千本、金葦の木の木
をあみーなるすが、まりんといひんりはさりき事
もひひぐくやはうん移(め)ちうニがのりうこそ
侍(しめ)さん、とくうやう事(こと)くろみまぬ品(い
あればーひてをこどうばーしてやまぬ正徳三年七月
むくうふ京の心向(こころ)る岩面山見よぬりける道(みち)
がはよといの山里をぬもこーおくぬよる家(い
チ本さー帰(か)るとかと見つけぬちやーうよか是(い
神(かみ)の神(かみ)すある拘(く)らくむ(く)らくぬ家(い
う)なるの和(わ)がりけりけりかくうやうみせふうと
よ尾(お)山里をど、古(い)じとほくして種(たね)澄(すく)り
いひもけむとー遠(とほ)くまうるよあくびん國(くに)の宮

はこあどりんたゞひのふ孫のはうまやゝれど
か不むかへおもえしゝくことある新作して住む
かこそとおもちにおりひかはありまほくして田づ
するをのこよとバこれをねねてめあき里人の家
居了侍るとソアのやうの木、神の神よことをする
タレニコトナリテモアウのと松とバゆるといへり
はうもおひそり屋もせすなれいりるとも
日やしもくま王わら侍うば毛まく入候もふ
うびかんいはれりあひやうみ本をたまやねん
多はぬ仰ごとも候うかとてすきしキラ下モ候
あ、～いうべきこえむまつうしれどじごともは
ウだちうるあう山里人のかくかくくすくすく

入りまに見まばげまかとゆや、あらかせはせ
くべよゑやくゆしるあだまや、浦をひたか、ハキ木
とぞ楊をう桺とさりもあんとぬくもともぬ不
ノヌヌ翁かあひぬくせきすれかこづけて道のわく、
（まやもむ爪みみわきたりを見そ星はありび
とやつりかめどいひづくしゆくそとが務くしきれと
ちかのこめうするとにうとやくはお見もせら
をかよ侍の新宿うわゆしやまうりてのうぐ
て絶のばくまへおもひ竹をくしめとし侍うへれ
ど風ぬぐ吹くあるうろ、大う、キ破くぐる
う、吹きかちよへうたをを牛ばくのやうの
そとく船のちうにうちがく侍る、牛床のわき

うるせき風は吹ちまうれぬかたにや枝のれ
やかじよれたりばくわくじとなくてり
ばくわくわくかくとぞあじ加とすゆひげちづれ
おもひ竹といかせれどちま竹と加根のむすみ
三わはうりあくへくらはあくう乃アキモ通する
棟とたさくらるあれバねく休メシカヘまそ辞
のくえりをおとしの外といつゝキ山人のいのそ
ち本とつゝ物乃クヤクをかどろバクがすはく
使くえととくにちどりくもあくぬハ十伴の男
朝をすなよそぞりはくわよつるあおはくらが
たたくうちまくわくまくわくまくわくまく
ちうはくとく金をもかとくたくほーたふを多く

をばやくとあめゆうるる元在るむかうよぞすめ
りゆてどもむとあるチ本とくとハシケル却
手の人々のむなぐさますにいひあたうひあやえなうと
をり川ぞおもひうりゆると初うりあゆるゆも
は本の名をいふよいかよこくじかほう本とぞい
くでうつう本といがくやと車てとばくほう本と
はまばかつう本とぞうはるまうとことわくもさと
えぬこくへとくつとあすこーとぐくとむつくれ
はくさくして柴ガクとげつゝ立てやくくじくくそか
とかうじていんくやとあくくおきひちぐくたるゆ
をすこーぐくも相一(よかー)かかふとソヒウはくと
いりうごるかじい川とばれこくとくとくとく

と持つてぬこの木乃加比棟アラモト御ひぐれもすすゞ
の人の肩か物とくつくさみか似らきむはうふと
ハシカとはゆてもあらまね、うりにねどアヤウの物と
くつとも本といがえち本をばもぎとじゆそかはう木
どヒイカ(まゆ)キ本をうほを本よりカハクつうさ
ヒイカがちや萬といがえ一とせ伊豫の國(は)カ
ウて無山といぬよいづくぬ移山といがえ七八里ば
即ち夕ぐ入也てやく而も宿也海の住、うし岩を
山便(まへん)すすり石を力(ぢ)て、うして、うたまば
山あらか、うして馬を猪(いのる)りつま、る
き乃こまつりカさは、おゆが凡もあとまの人乃やう
すすめお高(たか)の峰(みね)を下れ、何事もとくさると

そもあはれよいかとよばううをわる。やうば
こと多かわらさきすといからうやあらしとせん
はのよたうけ後うにといつゆとまざむよひ
石をうちぬ國のあうけるよとせんをすふ人皆
モトアサモビ平疋紙はこうととくとをあや
まうくつせといむすて背疋^{ハシマ}生れ^{ハリカ}か
いが草をえううと「御」^{ハセ}ねかううと「か」^{ハセ}
いふの三乃やうと來の事のうにあういばる
よとをこづくはとおせこりて多とあうはと
きすすりあうと「左」^{ハシマ}まうちれよりうはと
ハシマとこうのへあまくわまくわづしきえ
んみ毛め波さとキ節まをほじよ御^{ハセ}はと
御^{ハセ}す

○仙臺より^{ハシマ}田舎^{ハシマ}山里^{ハシマ}をなまく新^{ハシマ}あすくぬ
ルバ失てハ田舎^{ハシマ}をとくあるといかハ^{ハシマ}かうやうと
とわても雲^{ハシマ}が烟^{ハシマ}といかハ^{ハシマ}あす^{ハシマ}三里^{ハシマ}をうりもゆく
うして愛宿^{ハシマ}の脚^{ハシマ}レ壁^{ハシマ}のう山里^{ハシマ}清白^{ハシマ}の脚^{ハシマ}封^{ハシマ}
谷川^{ハシマ}いときよくあがれを^{ハシマ}香魚^{ハシマ}を貢^{ハシマ}とくと供
御^{ハシマ}す

○仙臺より^{ハシマ}田舎^{ハシマ}山里^{ハシマ}をなまく新^{ハシマ}あすくぬ
左^{ハシマ}あらましと思ひ^{ハシマ}と新^{ハシマ}が無く落^{ハシマ}る
と落^{ハシマ}りてメイヨ^{ハシマ}か^{ハシマ}タといがあれ名^{ハシマ}落^{ハシマ}る
落^{ハシマ}者^{ハシマ}一^{ハシマ}取^{ハシマ}篠^{ハシマ}等^{ハシマ}とくびとく^{ハシマ}武士^{ハシマ}の名^{ハシマ}落^{ハシマ}る
落^{ハシマ}者^{ハシマ}又^{ハシマ}木桶^{ハシマ}と名^{ハシマ}落^{ハシマ}る

本名文宣の俗人等々文宣ハ舟^{アシ}すねとあく人を
有る。又ハシク船^{アシ}と覺^ムし侍^スす。知り
れ^バ何^{アシ}又モ甲言^ムハ御^ミモ^シモ^ケシ^ム
御^ミカモリ^トあ^ムメシヨ^アヒ^カシ^ムア^ムモ^カス
謬^ルキ^シカ^シル。辛^カシ^ム

一
仙臺^{アシタマ}も諸^モ以^テ多^シ怪^カ人^{アシタマ}也^タ安^シ
の短^ク革^{アシタマ}刀^{アシタマ}の主^{シテ}者^{アシタマ}江^{アシタマ}戸^{アシタマ}も^ハ通^シ途^{アシタマ}の人^{アシタマ}元^{アシタマ}下^{アシタマ}とい^フアシタマ
通^シや^ハ始^カむ。あ^ハうれ^シ中^シを^シ左^シを^シ稱呼^シ
さ^シニ^ハ紀^{アシタマ}福^{アシタマ}勝^{アシタマ}等^モ伴^シ見^シの袖^{アシタマ}ゆ^ハ。人^{アシタマ}あ
あ^ハう^チも^チギ^ル重^シう^シは^タや^ハあ^ハと^シ思^フ。人^{アシタマ}
元^{アシタマ}下^{アシタマ}子^{アシタマ}も^ハう^シる^シ。人^{アシタマ}下^{アシタマ}の者^{アシタマ}武^士の^シあ^ハ

生^シき^シも^シハ^シテ^シス^シア^シト^シシ^シん^シと^シの^シは^シ非^シ職^シ
凡^シ下^シの^シ者^シも^シも^シ有^シ。と^シも^シか^シ計^シセ^シと^シ見^シ
ウ^シハ^シ非^シ職^シ凡^シ下^シと^シも^シ通^シ稱^シ。と^シも^シ文^シ凡^シ上^シ凡^シ
と^シア^シり^ア有^シ。と^シも^シき^ケリ。何^シよ^シか^シる文^シあ^シ。

○消遣隨筆第四

黒燒^{アシタマ}霜^ト云^フハ和稱ナリ既ニ鹿角^{アシタマ}末^ニスル^{アシタマ}鹿角
霜^トイフ^ス和方ニ鹿角^{アシタマ}燒^テ未^ニ霜^トイフ^ハ煮爛^シ
テ^シ粉^ニシメル^{アシタマ}云^{ナリ}

○
贋^{アシタマ}頭^{アシタマ}

鷄^{アシタマ}龜^{アシタマ}ウミガウス 本艸綱目釋名贋^{アシタマ}頭^{アシタマ}音戲備雜俎^{アシタマ}俎^{アシタマ}者^{アシタマ}非^シ曼^{アシタマ}贋^{アシタマ}
屢^{アシタマ}通雅蘭山曰贋^{アシタマ}頭^{アシタマ}ハ同字ナリ當サニ贋^{アシタマ}頭^{アシタマ}ニ作ル

音備 戲詳ニ正
字通ニ見ニ
重キノ負ナリ 石碑ノ下ニアルハ此龜ノ形ヲ象ルナリ
又俗言ニ人ノヒイキスルト云モコレヨリサツ

○ 古諺所謂敵非敵必責於己と考へて私と責む
敵ハ稀也トカニ心づけシモと責め。敵日和
まつゝ私レ身を因メ而氣を憚ム。人云
貴ありテ(さむ)可リ叶公敵是いつれかれハ種々の事
為邪モ可リ是と退渉するとかりはしも可る附
「要ムリある者ハ為」要と増し被(ひ)アアア
ク人「毛々病々氣血日々は衰ヘ多病氣弱」
卦引「敵病ウ病レナリノ移ヨ布トをヒス敵
力ヨ眼ホシテ遠ノミトナシ是と以テ子ノ敵

あるぬれの増長をみゆく
○ 嘴声の土俗の秋 邦太左の遺風か夕と云ふ事と
さくよ思ひすゆく多教あきゆ 佛か神
と云ひるよハ地と擇ひもチソ堆くして東上けつ
りけとちて一存也アリ酒井はくす持モル
主けつりりけう御石一 りしいわ(主)間高
の記はあまをこういもいをいをのすけ考證するに主
きし左史を考りよ左一へ あといがより不これら
とソアリとしかく ちねる高く 蔽きに多く おほく
りの酒をほがみ大れ身 ほ埋め取るちねを税ひ
重ねても唐といひの名を考證する亦波土人の賛唱
の主教考教すも多税島と怪し後續めと

一間の酒河へ舞舞^ハ人知りも多良者^ハ多^シ人方
有^リ外^リ一軒^リ、主^ト酒^ト水^ト酒^トみか^ハて税^カ
セ^シ笑^カ萬^キの^シシ^ク可^リト^トはれすか^トち^クい
ス^テ魚^カ左^ト風^カと^トい^テ見^カセ^タ、^ト林^ト往^カ
ナモ^リレ^シア^タス^トア^ハ婚^カ禮^カ始^カ夫^カす^ト
舟^トミ^リケ^テ數^カ舟^ト通^カリ^シ及^カ舞^カ簾^カ入^カト
夫^カす^ト帰^カ方^カ通^カリ^シ及^カ舞^カ簾^カ入^カト
御武記日中紀^カ仁清紀履中紀^カちとふも見^カ
ト^シ舊記^カよ^メへ^カ式^カ載^カる^シアシ^ト○^ト班^カ
ノ^レ歸^カ時^カみ^シ入^カト^シ提^カ幕^カ入^カト^シ歸^カ時^カ
班^カ方^カ行^カト^シ歸^カ時^カ想^カ於^カ退^カキ^シ
先^カ歸^カ歸^カ入^カト^シ多^シ班^カ歸^カ歸^カ入^カト^シ也

○戸全^カ心男^カ年十五女^カ年十三以上聽^カ婚嫁^カ乞^カ
へ^カる^シ而^シ清^カ日^カ一^トに^シ住^カ川^カ淡^カ高^カ和^カ刑^カ禁^カ
ナ^シ也^カ○^ト妻原紀用^カエソ詞^カ婚禮^カチフル^カ送^カリ^シ義^カト^シ婚^カ送^カフ^カ婦^{アリ}テ
其^カ申^カ合^{セシ}在^カ仲^人ナル者^カ姫^カ服^カ後^ニ隱^カ行^カ其^カ小^屋
ニ到^カ甚^カ夜^カ兩^カ親^カ息^カ五^カイロ^カハタニ^カ並^カ居^カル所^カ伴^カ行^カ
及^カノ^レ碑^{アハク}アキ所^ニオキ更^ニ雜^カ節^ノニ^テコ^ト祝^カ事^ノ話^ニ
ノ^シ仲^人ハ^シ取^カリ^シ舞^カ床^ニ入^カレバ^シ姫^カ佛^カニ^シ置^カ彼^カ星^カ
ノ^シ整^トイ^{ヘリ}又^カ舉^カ旗^{ヨリ}イ^ヘナツケアリ^シコレハ五^カ年^カ
ク^シ徑^カイ^ツト^ナ一^所ニ^ナリ同居スルナリトゾ

○銀車^カ行^カ駕^カ新^カ略^カ海^カ卒^カ秀^カ由^カ緒^カ書^カ内^カ六^カ代^カ日^カ庫^カ堅^カ
候^カ代^カ竟^カ事^カ於^カ芝^カ綱^カ繩^カ新^カ成^カ所^カ用^カ
作^カ舟^カ勤^カヤ^シ大^カ所^カ用^カ勤^カ申^カ未^カ儀^カ
大^カ猷院様^カ所^カ瑞^カ香^カ抱^カ歸^カ見^カレ^シ所^カ中^カ之^カ方^カ達^カ
印^カ城^カ南^カ有^カレ^シ歸^カ宿^カ傳^カ習^カ中^カ而^シ歸^カ所^カ未^カ内^カガ^シ也^カ

傳より而嘗てあら爲シテ而執春日局シテ上御天満ノ

而考判シテ修造シテ大僧正而判稱シテ次第ハ

而據名ルハ

代替ル也

而參行者

而執事者シテ而據也

在所當中シテ而萬物を買ひ潤シテ代物シテ而據
代物シテ而錢を而足シテ國中シテとゞく老母シテ而
不存行シテ女孫シテ而足シテ故來シテ牛馬也シテ又足袋を

何すシテ不_シ以文シテ而取牛馬也

而更シテ懸財金銀也シテ新シテ錢シテ仁舟シテ而詰也シテ

而代毫毛半纏シテ而據シテ而蒙蒙シテ而吉事シテ云

大傳シテ

天海

○天海月日

天海局

而據焉

多錢貨無足走千里シテいかゞシテ錢を足シテかシテハ
則至シテこれシテ足袋シテねすシテいづシテ株文シテ捨文シテ而
以シテ之シテ年高疑シテりシテ口說シテ多解シテ

應永 年足利方義持シテ勝宣院シテ代往和鮮國承
舉錢三千萬文事貲シテ而賄賂金萬石シテ日而シテ多
貴院シテ金兩シテ五萬石シテ而多金シテ多無シテ金シテ
本四百八十立シテ持シテ而有故僅三千萬文若通
用不足而秋糧多後承舉錢薄足シテ仁舟シテ而
於京都喩法刑部與關シテ以シテ者故車乃シテ不代目岐

成化庚辰堅信寛永十三年於芝細繩年号左生號生敷
淺所用ノ佐村大僧正天滿ノ十三東嶽山ノ寺号ト
以シ而始シ年号トソシ観承西國靈山代不改シ
佛号ト志シく吹笛トソハ師陽尊ト伊セ方角
伊深ト南方南ト佛不_レ也見立右ノ和ト向シの龜井
戸多神ト社南方ト鉢坐トソハ調繩ト古ト
梅ト山トシトソシ伊_レとも詳シ之
少レ峰博平年ト肉猪トソハ抄錄ト古ト此ト之
て麻繩銀ト後シ時代ト竟承西國靈山傳ト由
焉ト也ト

○飯粒ト餉ト鉢ト鈎ト鉢ト也ト

古ハ脚タキ點タマ修ト見ム紀氏ト土ト依日行トソハ不

飯トモリつ百ト也ト考證ト曰シひがハ飯粒ト
又モ今トいハめトつハ也ト古事記ト飯粒
を保ヒいヒがトづミ安井記ト人名ト飯粒トある
いヒがトよ先縣主ト飯粒ト書タマ據タマ磨國郡名ト楫
保ヒ伊ヒとあるメ飯粒ト義タマ物ト名ト胎
目ト和名沙新撰ト鏡トかどシ不ト訓タマ也ト飯
粒ト似シ古ハ本ト名ト也ト

胎目又以和名以比保

和名鈎瘡類ト胎目病源論ト胎目年号案胎即疣也和
手足疊包生如豆癰強粒肉也ニ新撰ト鏡ト疣胎三
形同有流反腫也伊比保トボトハ昂ト飯粒形似シ
ルニ因テ名シトナリ

○
掌中保

天留保守卽光棍二弟天留星光保守星棍忙呼登吊保
宇訛唐話有光棍還將這光棍打酒人須待秋酒人麼的
話橘窓布話

元
棍

時鐘

余幼ナル時清菴先生諱レリヤ 時鐘ノ六ツ四ツ九ツ云
トイフハ老陽ノ數下テ九ノ數ヲ取ルト但其本義ヲ詰リ
間ノ力モ無ク過キ行キス楠窓布諱ニ貝原篤信ノ說

長石

ヲ舉ケテ曰擊鐘一九九。二九八。三九七。四九六。五九五。
六九四。蓋二九以下皆除十以為數。此乃貝原篤信說。其
以子午為始是也。然不論昼夜。以九為首。且以九準。下
未訛星何義。

八
年
二
月

延瀬川 ハニツキ。 ハヤツキ。
新中新川郡ニ在リ萬葉集ニ歌有リ

○ 乌卵

支那人弁 本朝云爾蓋烏ハ日也 卵東方也 猶言日東
見于善無畏碑

○ 梵曇

梵曇ヲ推考ス(キ經論)
日藏經 月藏經 文珠傳軌經 摩登伽經
舍頑諫經 立世阿毘曇論 宿曜經 正法含經
起世經 樂炭經 紀世因本經 長阿含經
新舊婆娑俱舍

最梵曇ノ深理ヲ見ルヘキ者ハ

立世論 日月竹品 日藏經 星宿呂

唐ニ印度ヨリ将来スル所

○ 西山拙育戲作

不依ガセシカナリウカカウホトト

セアリセアリセアリセアリセアリ

○ 乳母 谷川淡焉和訓禁

○ あゝ任信隨從をよめく見るよ、おおおお、是ニ
はくもの義也。兒女子飯をよ、といがうと
の畧也。足利りあくつりともハ凡をや兒の御もす
とつて。乳母の名をよ、といへ事源氏枕草
絃唐體也と見る、うつめのと、義もなそり、之
れ、縫母の義も聞きよや度強の人、うちも聞け

瞿曇氏曇

加葉氏曇

僧俱摩羅曇

考威曇

金俱陀ノ七曜曇

冠山老爹曰因艸子と今も乳母の事とまゝといふ

○西方の神々乳を MAMMA といふ小児の神と
詫へて暗食ヒリカレニムエニムアシムムーデル
正註セリ Forest man. man.トアリ。乳母ハミンチ
ムーデルといふ

○梢子ビイトロ梵語

羅甸ヒトリノム似フビイトロハヒトリノムの梵ニ

○僧祇律 穢毘勒麦酒和薑ヒールム似フ

○シヤウフコムギノ滓ヲ麥麸ト云カテコ一名モヂフス

時珍曰麸乃麥皮也

江戸今食用ノ麩ハ漢名麩筋ト云フコレハ麩ト麩

トテ令セフニテ造ル光明時珍曰麩筋以發與麩麵ノ布水 中擦洗而成者此時ノ水ヲ飛ノ粉ヲトリタルラ麥粉ト云光明時珍曰麥粉乃是麩粉洗勦釐俗名小粉卽漢名ナリ光明出一名小
此名經鹽原鹽粉本草集言茂實按ニ俗名シヤウフ麥粉キ經鹽原鹽粉本草集言茂實按ニ俗名シヤウフ方書ニ麥粉ト云フハ皆小粉ナリ

○勸學院鳩吟蒙求

兼山先生曰蒙求之堯其在鎌倉氏以来平僧兼好之品古書不取蒙求焚其書中引孫晨之事則讀則讀焉雖則讀之亦不好 岂以爾時非茹充所尚乎蓋古昔皇朝之盛天子及諸姓之學以此課童蒙云故今俗尚傳勸學院鳩吟蒙求之謗其為朝莫誦習可以見已云之蒙求標題刻スル序ニ見ヘタリ

○寺

事物紀原曰漢明帝時攝摩騰自西域白馬駁經未初止
鴻臚寺遂取名浮屠皆寺○第世四代推古天皇二年春
二月丙寅朔———諸臣連等名為君親之恩競造佛
舍即謂寺焉 寺トイフ訓ハ韓語ノニナリト 諸君
ニ見ヘタリ

○サリガニ ニサリカニノ略諱ナリ

拉姑一名哈食馬清高士奇 東巡日錄一名喇姑盛涼此物西蝦夷
地久ニシツンベニテ捕ル東匠室鑑曰石蟹シケニモクシカニ螃蟹不同
形且小其黃附久不合疽瘡螃蟹橫行石蟹退行此亦一
異生溪洞中 右灣洲夷譜 茂質按拉姑哈食馬ハ北
韓地方ノ名ノ音記通志ノ喇姑其音記名ニ因テ字ヲ

製セシト思ワル

○孫太郎魚 川田郡才川產

九香裏ノ一種ナリ

石蚕又一名石下新婦

○海蠍

和訓奈末古本艸綱目不載之馮時可兩航雜錄ニ載ス
ル所ノ沙蠍ナリ一名沙蒜寧波府志亦載之立雜俎一
名海男子葉性纂要海蛆溫州府志金筒蟫史泥一名沙
噀 諸物異名疏亦同

○東海夫人

異異圖讚東海夫人淡菜云長崎ニテカレセカイ乾隆
帝ヨリ朝鮮エ有命ニテ當時海稅ノ内此品ト鮀海參
ニ三呂進貢ノヨシ尤美味功能モ多キ由北地ニテ專

ラ貴ヒソロ由
間宮林藏旨臘

淡菜

關書曰、淡菜、一名殼菜、異魚圖讚曰、東海夫人、淡菜、有殼形雖不典而益惟簿、未以衆類、堪為大喙。○達按スルニ淡菜俗ニイノ貝ト呼フ北國ニテイ貝ト呼フ毛貝庄云フ藝術廣島ニテ瀬戸貝ト呼フ形婦人ノ瀬戸ニ似タリ殼黒シメ厚シ左右ニ毛有リ肉赤色味美也淡菜ヲミルシヒトスルハ誤也淡菜肉中ニ珠アリ昂テ尾張真珠是也。右松岡玄達怡顔齋介品ノ説。

○ 滿詰 キヤ。ウ。鷺
カウサ。紙

○ オイドウ 乞食非人ノ事と仙臺封内ニテソカニオルハ庭訓傳來より乞食隱道モアリ但隨直モアリ出所

ハ末考ス備前モリホキナドウと唱ウル由
○ 子ヲ生ス 產婆コナセカ 仙臺方言紀載ニテモナズトイフ
他國ニテハ多ハ產ウトトイフシナサヌナカトハ古来
イフナレハナズモウタモ同シトニテ昂生ナス怪ム
ニ足ラス

○ 仙臺東山千厩ニ作ル馬ノサレガイハ其茅ヲ濁酒ノ渣ニテサラストイフソレ故酒造停止ノ年モ同處ノニ免許トイフ其製造未タ詳ニセス此村ハ秀衡ノ既ラ置キシ地トハ申傳ルナリ

○ 種石蓮子訛

夫蓮ハ淤泥ニ産シテ泥ニ不深水中ニ居テ水不没根
茎花實其品ヲ同シフセば清淨清用シテ群美ヲ兼得タ

リ藕蕊ヨリ第ラ生シ第ヨリ藕ヲ生シ蓮^{ハチス}ヲ生シ菂^ヲ。
薏^ヲ生ス其蓮菂トナリテ始黄ヨリ青ナリ熟ナルニ薩
ヒ綠色ニナリ黒ク熟ス其中ニ白肉ヲ生シ内ニ青心
ヲ隱シテ石蓮子トナル堅剛永久ラ可歷又薏ヨリ藕ヲ
生シ後萌芽展轉シテ生々不息コト本草諸書ニモ謂リ
蓮ハ爾雅ニ載タルラ始トス又陸璣詩經疏云其莖為荷
其花未發為薏^イ已發為芙蕖其實蓮蓮之皮青裏白其
子菂菂之殼青肉白菂內青心ニ三分為苦薏也凡蓮ト
云石ハ房ヲ云郭璞爾雅注ニモ蓮之房也菂之子也薏
之中心苦薏也ト蓮之熟スルノ六七月之間也其子黑
黒ニナリタル時蓮房共ニ採收子ヲ下スベシ黒クナリテ
久シテ蓮房ニ在時^ハ脱落者也倍子土種様ハ黒殼之

上下ヲ白肉ヘカケ所去青心を見エル程ニヘキ取直ニ
清水ニ浸シ置時ハ一宿ニシテ所去シ處ヨリ芽ヲ吐
出ス也水ハ深キ盆中ヨシ若淺キ器物オレハ夜中蓋
ヲナスヘシ鼠好ミ食スル也下種シテ後モ泥中ヘ鼠付
時ハ一粒モ不殘食盡スモノ也又家鴨鷄鳥之類好ミ
食スル故竹簍ナトヲ蓋ヒテ可避之一日ニシテ青心
見ヘ二日ニシテ鉤芽叢シ一日一ト延長シ大抵五六
日ニテニ莖トナル此頃泥中ヘ移シ種テ可也泥中ヘ
入ルトハ不深不淺青芽之水中ニ見エル程斜ニ挿山
ヘシ此芽出テモイヨク鼠食ヲ避ルキ當スヘシ十日
ヲ過レバ荷^{ウキハ}錢出中之芽都合三莖ニナル是ヨリ次第ニ
生育スルト一日ニユハ令ツ、延立莖モ夫ニ准シテ太

ルナリ 鋸之草本ト遠蓮菂之始ヨリ 根葉ヲ見シタル
ト赤子ニ胎中ニ支體ヲ全具シタル如レ菂之生スルト
房殼ニ趺着セシ處ヨリ 葉莖ヲ倒生ス外物ニ懸隔ス
藝家又好事者流秋收之子ヲ採翌年ノ春分種ヲ下ス
故兩年ヲ歷三年目ナテテハ花ヲ不生ト今考フルニ六月
採收ニ子直ニ水中（浸シ）芽出テ培養ヲヨクセハ七
月之末ニハ丑葉モ可生今年七月元錦邊之菂子ヲ採
其日下種セシニ十五日ヲ歷テ生育セルト下ニ圖スル
如シ五十日ヲ歷レハ藕心拇指大ニモナル（シ）若ニ
至リ暖カナル唐窓ハロナトニ圍ニ置ハ未春子穀芽ハ春
種之半年余ニ經ニモ一サル（シ）培養イヨク辛厚シ
セバ其年花實モ可生道理也况ヤ翌年ヲ過レハ花

十カアルヘキ也春種二月彼岸ビナレハ 鋸寒之氣モ不考
夏種之子トハ生立様モ甚可惡其冬ニ至リ漸夏種之半
年ハカリノ者ト同ニカルヘシ因是テ六月初收之子直ニ
水中（投シ）芽ヲ出サセナバ翌年初株ニナリ花モ可生
ト思ハル、也苟實水中（浸シ）又泥（シ）培養テヨリ烈日ニ
曝スベシ陽地ニ置（カラス盆中）終日暑天炎風ニア
タリテ日煎之如ソナル水ナレハ同日同時ニ下種セシ
者モ日ヲ隔テノ生セシ如ク也補八月ニ入テ下種セ
サレハ天炎造化之理感スルニ餘アリ又始清水ニニタサ
ス不淨水ニ浸セシ者ハ青心出タルトニイツトナク白肉
ヨリ腐爛スルモノ也又千葉者不結實ト集解ニ云シハ
時珍之傳ヘ誤ナリ今千葉重葉之蓮菂萬葉蓮舟葉

蓮西湖蓮之類實入コトニコトニヨクシテ然モ生シ易レ
諸蓮子之形狀區別アリ予別ニ萬譜ヲ作ル因テコニ
不贅于時文政辛巳蘭秋晦日芝陽貞幹小錄

群芳譜種蓮子條云八九月取堅黑蓮子尾上磨尖頭
全皮薄取墐土作熟泥三指長全蒂頭泥多而重磨頭
泥大而尖種時擲至池中重頭向下自能周正薄皮在
上易生根日即出不磨者率不可生又一法用雞子一枚
開一小孔去青黃將蓮子填滿紙糊孔三四層全雞
抱之候小雞出取放煖處不拘時用天門冬未硫黃同
肥泥或酒鐸泥安盆底裁之仍用酒和水澆勿全乾自
然生葉開花如錢可愛蓮子磨薄尖頭浸靛缸中明年
取種開青蓮花蓮畏桐油忌也此說古未ヨリ傳

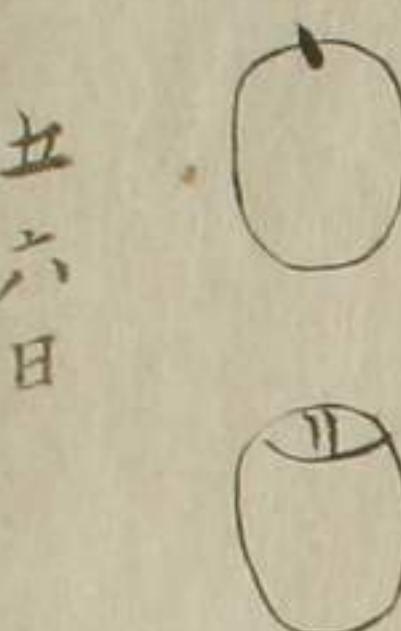
訛ナレ凡迂濶甚レ蓮子毛上ニテ磨シタリ凡肉上ニテ
研キレサレハ速ニ不生蓮子殼腐テサレハ不生コトニ始
池中ヘ拋擲セハ中ニ生シ難カルベシ予カ不信トゾロ
也

一日

二日

三日

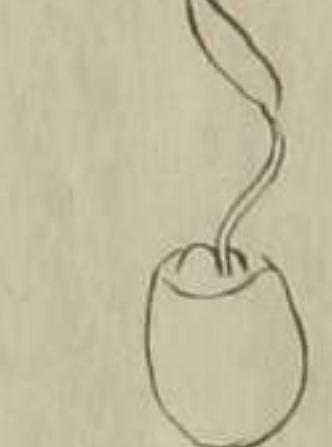
四日



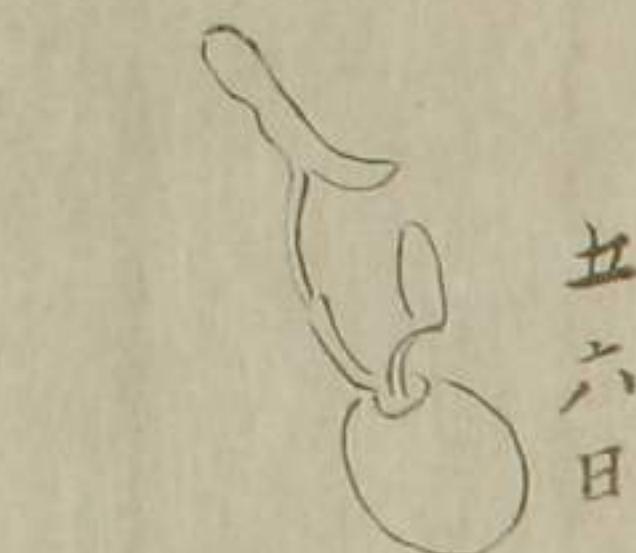
立六日

七八日

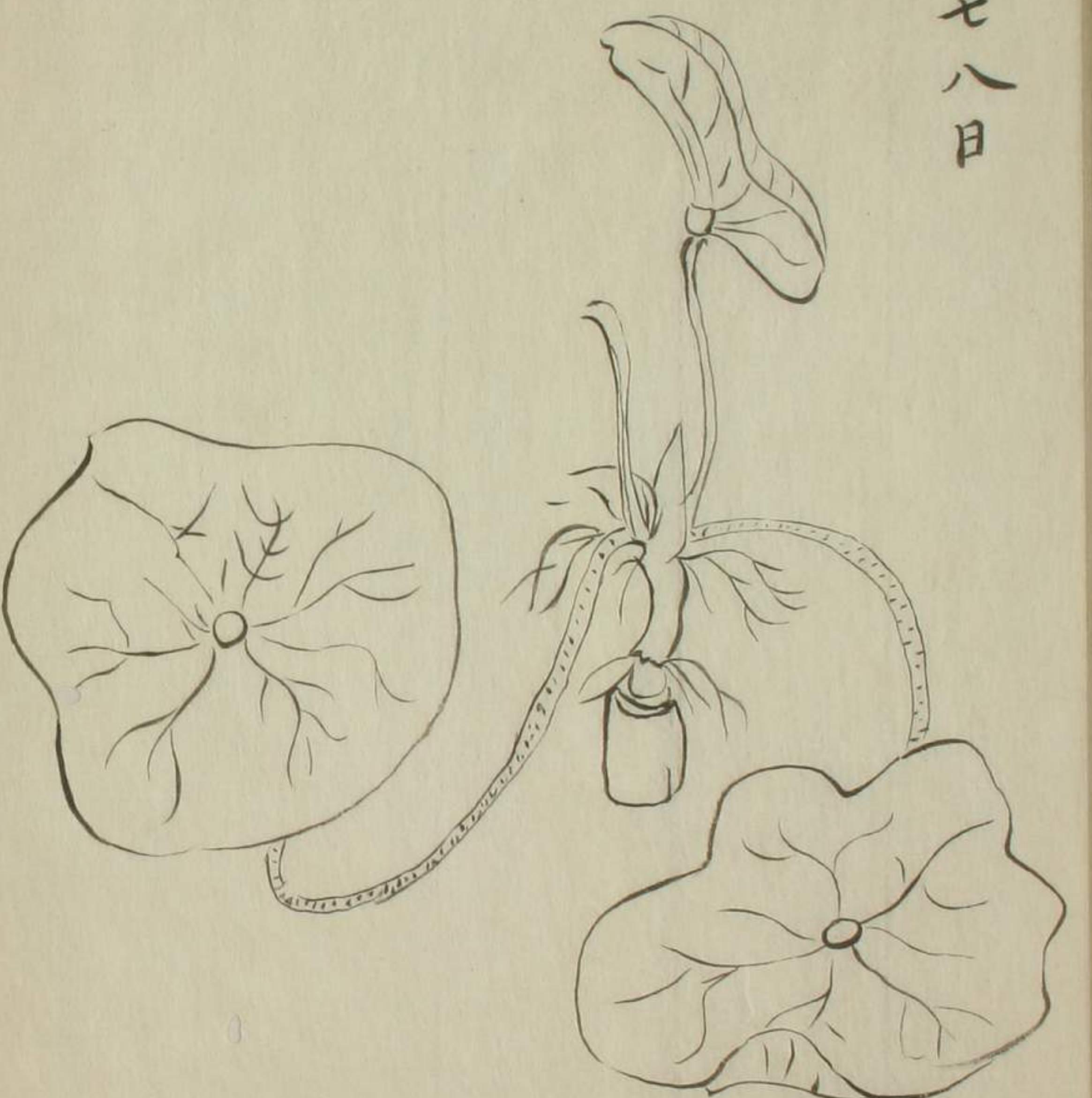
十日



四日



十七八日



○ 日本地上一度

二十八里二分 伊能忠敬実測レ定ル所ノ確教ニ
但兄ハ曲尺ヲ用ユ六尺ヲ一間トニ六十間ヲ町トニ

三十六町ヲ一里トス

獨乙都一度

十五里

コノ一里ハ日本ノ一里八方八厘ニアル故ニドイツ

拂郎糸一度

大里二十里

コノ大里一里ハ日本里ノ一里四分一厘ニ

アタル未吉上ニ同シ

常里二十五里

コノ常里ノ一里ハ日本里ノ一里一分

アタルナリ

小里三十里

コノ小里ハ日本ノ九分四厘ニアタル

ナリ

板

コノ九分四厘ハ一里ニ足ラサルモ

ニテ町敷ニ直シテ三十三町五十間ニ

尺四寸トナルナリ

諸厄里並一度

七十里

コノ一里ハ日本里ノ四分ニ毛ハ立七有奇ニ

アタル未吉上ニ同シ

力何處も一里以下レ申教テ丹敷ニ並レヒニも笄
盤古甚敷ナ至三十石付ラクケ何ナ何時トシ
何ナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシ
ナサヌ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ何
ナナナナナナナナナナナナナナナナナナナナナナ
三ナメ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ何ナ何
ナナナナナナナナナナナナナナナナナナナナナナ

○時珍曰匾桃出南蠻形匾肉淡核狀如盒其仁甘美番人
珍之名波淡樹甚高大
南蠻志曰偏桃出波斯國彼呼为婆淡對三月開白花結
實如桃子而形偏故曰偏桃肉苦淡不可啖核中仁辨西
域諸國並珍之

果譜曰巴旦杏一名八丹杏出凹地今諸處皆有樹如
杏而葉差小實小而肉薄核如梅皮薄而仁清耳鮮者尤
脆美稱果之美者

按巴旦杏蠻名亞曼獨爾俗稱亞門菴蓋蠻語轉訛也
近來傳種往琉球壽星桃亦俗稱亞門菴不可混

月池類抄所收

庚辰冬十一月 桂國寧拜書

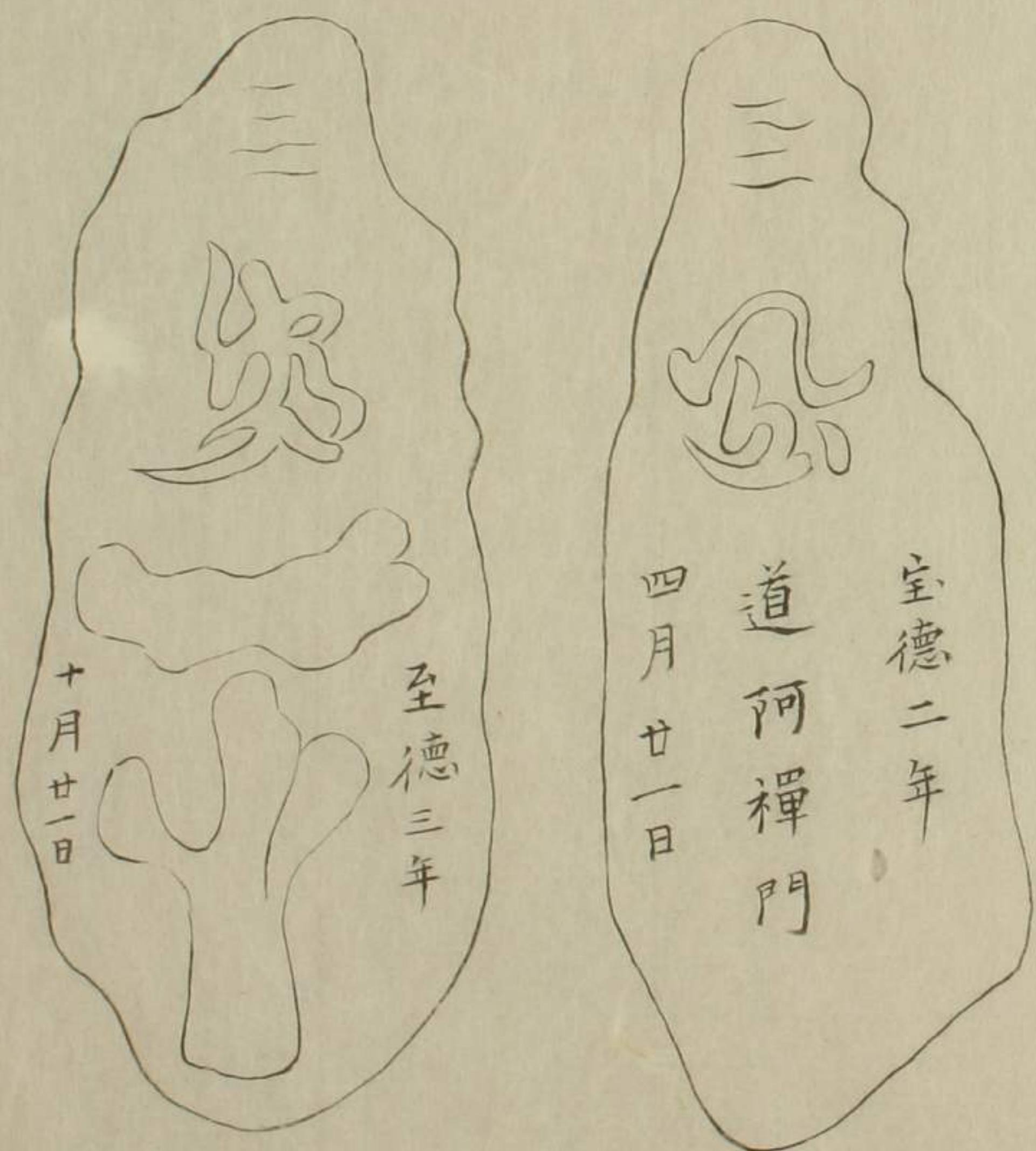
○牛郎在失火ク又類燒ク及アリナキノ牛ノ火ナ
在レテ駆レテアリ火アリ火アリ火アリ火アリ火アリ
動ク放クアリ火アリ火アリ火アリ火アリ火アリ火アリ火アリ
モ牛郎在燒クアリ火アリ火アリ火アリ火アリ火アリ火アリ

すてし被り下す鷹延焼死、うといの助即家奴ハ備あ
の者か、彼丘園の民百十り牛を使ひて有り失火の
事あれ、牛部をも角も立^チ白と謂ふ一あすへあ
れと見るに牛は立^チ血をすか^ムといふ牛を畜の
而の者、名の居る所をよき多^シと云ひ、知
ゆす民家牛をたのめ^ス立田代^シ（主あり）とあ
れを替^リ、かせはつぬ牛、立田にかすと云ふ車輪
の多^シ事也と云ふもあらん。

○文政四年辛巳年二月四日清水御門石垣土崩所
御修復之第土手ヨリ堀出ス

御修復之筆土手ヨリ堀出又
左吉石而上

右青石而高サ何レモ貳尺程但伊豫石也

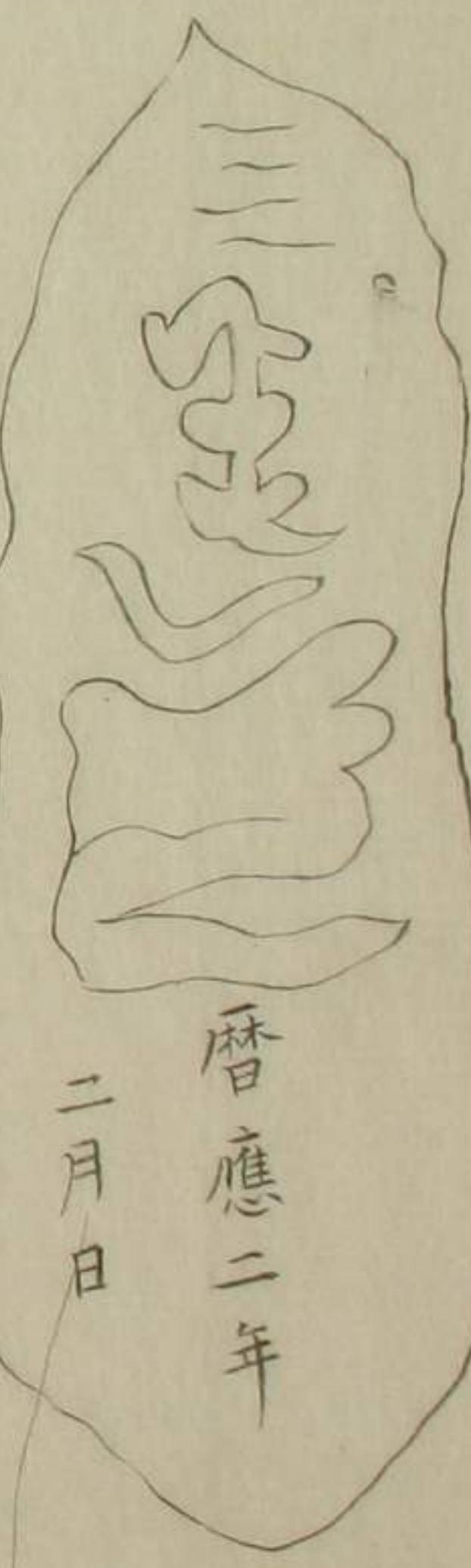


文政四年正月

三百七十二年成

同四百三十六年成

四百八十三年成 同



曆應二年

同三百八十一年成
或三百四十三年凡云

嘉吉元年
妙善禪尼

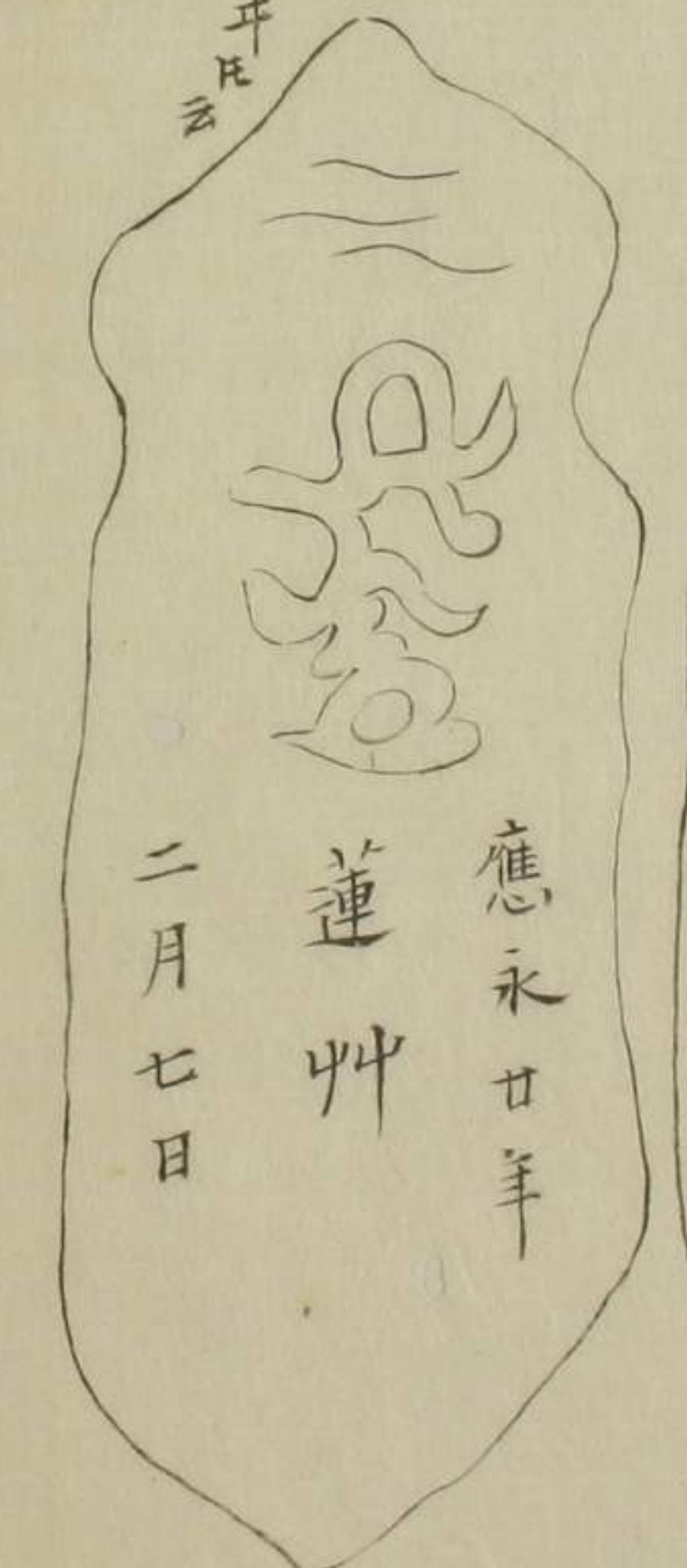
八月五日

同四百九年成

或三百八十四年凡云

應永廿年
蓮艸

二月七日



○

太平日久——諸民奢淫と極りと云——百年の先十
九歳者のあらを嘗て乃れ嘆慨して言ふ事せる
多一日奢淫せうにん比ひ——又五年を重ね日々月々増出
ゆく也ゆく奢しやの極きわともソクしきしいうよかけくとゆ改
るよ——世一変かへ——止と已まあるよし者しや私わたくし也
ク時ときハ年々のんびん物ものは増ます——さすもあきらめ家いえを
廻まわ飲食おんじきあつたあつたかかと歎くいるよ暇ひまハかし活はづけけよ
の多用たうよう而がは量りょうが多おおよしとといか魚うおををす
夕ゆふと用もちひ微すく——りく奢しや淫いんは事ことなきなき——已まを
すすと乃なうるうる物もの奢しやりとと云いななけるる人ひとせんせんすすかかと
主ぬしててかか思おもひひ多おおよよ以ひ——大正寺だいじょうじ本ほん山さんといい老お人ひと嘉か保ほ年ねん万まん述のべるる續つづ後ご種たね集しゆ——ちちと見みるる

亂世の人の脅とつかずすちきさぬ事至也。第
考ふ學問とすもおれし詳にたゞあれとゆ月
夜也の武士たり。大身を身にす力の筋うのあはせ
かとばし裔左衛門はゆく付て、似處の事
研めり取調へ自身を詮め裔女首を倒すと見形
を宣くば一なまえ難縫國名がまき事起く物火の
費り多く知らぬかうる五絆めいる物手ともハ中
事考りみやか分そハ賄金買掛くねりけども乱世
の武士の極、夜也の武士とハ大きよまじひオーライ作
わの面もヤホ掛因るはほし面相ありとあがめ
まく浪子アリとあとくト云ふ是は所アリシ織田
初と用ひサセテテモ多を詮め抜きと仕

ヤ儀め多ゆ度よな諸君は而くらあるか魚め
多く身の在れともあつてあまき重くまで布子
取ハ綿服の外ハ省一夕ナリことくテテ身外事陣
は五石ハ猪の子立汁と豆黒豆と豆飯
物ナシ、豆と絹ナヒリを以テ世万事あ相
取付ナシタドモひ科陞御食好ミとせ年山
市へ具呈ナリヨリ既可ヤカトある。多るの一疋ナシ
め上根うりナキ多々差し附猪の仕人と曰
ウナハ内に宣ひ多々多々物入モノ、一切ナシ
とけてたゞく知行下さうの収納物觀ナラモサメ
云猪城よアま」て至レルとレ叙を多き以上武
氣のナレ件のあつてるよりぬくあり有めつも

飯ぬく味噌汁をもとて経きやかとくまでして
カツオ味噌ヲ経て墨床飯を経汗モ経きやか
くセ左の事へて時武家ノ下人をもとしモノを
ありけつき飛り入る味噌汁モ経きやかヤ
テリシ叶ことく至る事有りもはして、承ら思
く汁ゆ味すきあとなり御子了事うとやめくま
り也

○ソヤウジは雪見よあ鶴坂所ヤモリヤ不く、
芭蕉翁うじといひ人ほよ勝氣モル所アリアリ
ルヨリツヅリモシイツ化モリて作しきりしが初ら
す庄舟也有 横井氏時般又並明又須寧後ス暮れ
モ居た蘿屋庄舟を半掃隱庵印

の塾在リア書の續編モ初セ一見矣

印
言井八月とき
をみるやさしく見る
あそ一立すと見る
空のほかそれも
をもと印

経九す五キ斗横一尺四寸
今横約一軸と云

是夏嘉四年丁卯冬のるる
年天明八年戊申ヨリて百二年

テ道ハ今の風月堂孫助、有
祖父もとあら聖集の作者も

印
持支みヌ
ころが持て
丁卯緋伊印
タ道行ノ印
手

風月堂を訪ひてむかし翁の才氣は多残す

一袖を乞ふて感あるの所、紙手を拂ひて一句ぞとも
主の所や吾の臣ありと凡ぬせなし
也有
あれよすりく乞うて喜びにほほえむいさ
ウリはヒリヒ喜びにすとあるよあれど元
きはいさゆめとすりまつりまつりやあり重し
ちくじに日は晴れあまきはあつようてし
とめゆる

主政ニツウヒシ庚辰ノ月ノ神

○飢歳ト策

兩足山大年寺寶永戊午奥州飢饉の年書

肯山公新造築せられしゆ立本の功は日雇賃
ウモウモモトモトホレ飢民を救ワセラレシテ少難を
カレヒ義修ムチ唄。續々補集を従ひ天正
年中かづらひより至しツバ丘巣内たゞ不作時米
穀の奪取を止ム陶々と心く悔き者有ル。飢は及ひ
新造食面と相あが東、乃ち本穀拂處の時多
左人の救ひ施ゆるも所もなき跡を拂ひ倒れお
果ツ者恨りあはとす。飯を豊臣秀吉云ばね
ひつ持とす。是芳秀ヨリは仰ふか高川桂川等の姓
名をとす。ナキニ神代持筆ひひ給ひ翌日
を1922年ヤマハルの飢饉の所を極つれりておま共
公の儀。やうのとく國方智の人も見る天下一統

の時多き事。多くは諸國の弟姫。急送の物。主
子能て力及ばず。方々を取る。多く是の物。
て劔揮を放ひ。トヤリと之。
肯山の劔。氣鋒。あくまで大利を奪ふ。送立。附
金。手縫。ハ豊多の故智。トヨリ強め。敢行。い
才智ある人の男。勿加一揆。又。しる。欵

○

木蘭辭木蘭不知名許作

男子代父從行
唧何耶復唧促織。木蘭當戶織。不聞機杼聲。唯聞女
嘆息。問女何所思。問女何所憶。女亦無所思。女亦無所憶。
昨夜見軍帖。可汗大點兵。軍書十二卷。卷有爺名。阿爺
無大兒。木蘭無長兄。願爲市鞍馬。從此贊爺征。東市買駿

馬。西市買鞍轡。南市買轡頭。北市買長鞭。且朝辭爺娘
去。暮宿黃河邊。不聞爺娘喚女聲。但聞黃河流水鳴濺。
旦辭黃河去。暮至宿黑山頭。不聞爺娘喚女聲。但聞燕
山胡騎鳴啾。萬里赴戎機。關山度若飛。朔氣傳金柝。寒
光照鐵衣。將軍百戰死。壯士十年歸。
來見天子。坐明堂。策勲十二轉。賞賜百千強。可汗問所欲。木蘭不用尚
書節。一作欲與木蘭賞賜願馳千里足。一作願借明送兒還足。
故鄉。爺娘聞女來。出郭相扶將。阿妹聞姊來。當戶理紅妝。
小弟聞姊來。磨刀霍霍向豬羊。開我東閣門。坐我西閣牀。
脫我戰時袍。著我舊時裳。當牕理雲鬢。挂鏡貼花黃。出門
看火伴。皆始一作驚惶。同行十二年。不知木蘭是女郎。
雄兔脚撲朔。雌兔眼迷離。一作鬼傍地走。安能辨我是

雄雌。

停機市鞍馬。云是從征者。脫戎戰時袍誰復知其假喚頭。
世無張華劍光息。匣裡雄雌猶不識。何況木蘭久停織。

花香春風十二樓。塞城一帶水空流。香魂夜々遙
在木蘭花外愁。

分明何振辛劍內。在花曲々笑覺空空。但原物

○對得トキテ山サン翁オウと摩訶マハと律スルと。梵ボン家カニと淨セイ家カニと。義イシ律スルと。摩訶マハ此コトは
翻フリ。大タツといふは正マサニ也。此コトは直マタニ也。直マタニ得トキテ山サン翁オウと
梵ボン美モクヒと。五ゴしうと。此コトは翻フリ。王ウもあ。摩訶マハと律スル

主ヌメ譯トキテ。ソリ。ソレ。ソレ。ソレ。大タツと。律スル
さうに梵ボン傳スル。さう。ねたよ。ソナタ。並アソ。律スルと。ソレ。
ラウ。得トキテ。ソレ。ソレ。ソレ。ソレ。並アソ。律スル。

妙ミツの

直スル。說文正見也。爾雅正也。玉篇不曲也。

又準當也。增韻當也。
直マタニ。正マサニ。當マタニ。義イシニテ直譯ト。イフ。彼ヒノ某モノ詔ヲ。ニタシカニ。アタルノ記ト。イフ。ナルベシ。此コト。

翻譯

大タツ 翻天フリテン

火ヒ 翻火フリヒ

人ヒト 翻人フリヒト

アギアギ 翻友フリヲウ

一物一事ヲ某モニ翻ス。是シ也。又文章言語等ヲモ
或ハ直譯或義譯其宜ニ。隨テ翻スルノ通名トス

直譯

右ノ如シ翻スル事ナレバ一言一物ニ就テイフ名目ナリ
只一事一物ニテ

カヲテ譯云筆キチタ譯云女人

コレ直譯ナリ 文章ノ上ニテハ逆モ直譯ノニニテハ
足ラサルニ依テ直譯義譯折文ヘテ文章ヲ譯スルヲ

翻譯ト云フ

義譯

ワイニテ 最清淨之義ナレバ對反ノ無垢ト記シ

ニーナ 東國ノ名ナレバ漢地ト記ス 此類意ヲ取テ

翻スルノイフ

對譯

對譯

十一 義謨

ワジテ 嘴日囉合

一二 摩尼

ト對音ノ譯スル所謂音譯ナリ

對注モコレニ同ニシ梵文ノ音ヲ漢字ニテ假字ツケニ

タルヲ云フヘシカレバコレヲ翻トガ言リスコレ梵

諸ノベナル故ナリ

彼方ニ有テ東方ニ無キ類ハ記ト言ハスメ直ニ梵語ト

イフ而レ此矣トハ對音ナリ

闇浮樹

阿育樹ノ類

彼ニ有テ此ニ無キモノ始後梵語ノヘア存スルトナリ

瑠璃頬梨琵琶ノ類モ西域ノ名ア傳フルノミコレハ翻

トセ記トセ言ガルト同事ナリ

行智上人曰譯諸ノ名目ナシ闕タル如シナレバ木乃伊
底野迦ノ類直ニ其物ノ名トメ通称スルトト覺エ彼

彼ニ有テ此ニ無キ物ヲ音訳スル名目モ有リタキナリ
漢人其名ヲ命セストモ新名目ヲ起スモ可ナテニカ

讀法納學傳授之謂也。學之既熟。則讀之亦熟。故
野之名。以之為號。無不熟矣。其讀法。則於其字
之旁。寫其音。如「野」字。旁寫「ノエ」。則讀
之。音「ノエ」。其餘皆仿此。故「山」字。旁寫
「サン」。則讀之。音「サン」。其餘皆仿此。故「水」
字。旁寫「スイ」。則讀之。音「スイ」。其餘皆仿此。
故「火」字。旁寫「ホ」。則讀之。音「ホ」。其餘皆仿此。
故「風」字。旁寫「フウ」。則讀之。音「フウ」。其餘皆仿此。
故「雨」字。旁寫「ウ」。則讀之。音「ウ」。其餘皆仿此。
故「日」字。旁寫「ヒ」。則讀之。音「ヒ」。其餘皆仿此。
故「月」字。旁寫「ツキ」。則讀之。音「ツキ」。其餘皆仿此。

